

東金市道庭遺跡

— 農業大学校出荷調製施設新築工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和5年2月

千葉県教育委員会

とう がね し どう にわ い せき

東金市道庭遺跡

— 農業大学校出荷調製施設新築工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —





遺跡から九十九里浜平野遠景



調査区近景



方形周溝墓出土土器



SS-008出土勾玉 2



SS-008出土勾玉 3

序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会では、埋蔵文化財の保護と各種開発事業との調整、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的とした諸活動に加え、千葉県が行う開発事業に係る埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について実施しております。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第45集として、農業大学校出荷調製施設新築工事に伴って実施した、東金市道庭遺跡の発掘調査報告書です。道庭遺跡はこれまでに行われた発掘調査によって、弥生時代の環濠集落や方形周溝墓と呼ばれる墓跡が発見されており、千葉県屈指の遺跡として有名です。

刊行に当たり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。

最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

令和5年2月

千葉県教育庁教育振興部
文化財課長 金井 一喜

凡　例

- 1 本書は、千葉県農林水産部担い手支援課による農業大学校出荷調製施設新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
道庭遺跡 東金市家之子字西大宮台1083-1 (遺跡コード213-008)
- 3 千葉県農林水産部担い手支援課の依頼を受け、発掘調査及び報告書整理作業に至る整理作業を千葉県教育庁教育振興部文化財課が実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、文化財主事 鈴木 彩奈、編集を鈴木と主任上席文化財主事 蜂屋 孝之が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県農林水産部担い手支援課、千葉県立農業大学校、東金市教育委員会ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方針は全て座標北である。
- 8 土器観察表及び本文中に記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 2007年版』に基づいている。
- 9 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/50,000 地形図「東金」「成東」「上総片貝」「八街」を編集
第5図・第27図 東金市役所発行 1/2,500 東金市地形図を編集
- 10 写真団版1の航空写真は、国土地理院による平成28年撮影のものを使用した。
- 11 方形周溝墓の主軸方位は、埋葬施設が検出できたものは埋葬施設の中心を通る長軸線を主軸とし、埋葬施設が検出できなかったものは北東溝ないしは南西溝に直交する線、北東溝・南西溝も検出していない場合は南東溝長軸で計測した。
- 12 方形周溝墓の規模は、周溝外縁部間の最大長、方台部については、周溝内縁部間を計測値とした。
- 13 須恵器については断面を黒色で示した。挿図中の「K」は搅乱の略である。
- 14 主な遺構・遺物の縮尺については、以下のような縮尺とした。
遺構 方形周溝墓1/100、埋葬施設1/50、土坑・陥穴1/50
遺物 弥生土器1/3及び1/2、土師器等1/2、石器1/1、石製品1/1
- 15 遺構種別の記号は以下のとおりである。
SS：方形周溝墓 SK：陥穴 SD：溝状遺構

本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯と経過.....	1
第2節 遺跡の位置と周辺の環境.....	1
1 地形と地質.....	1
2 道庭遺跡の調査歴と周辺の遺跡.....	7
第3節 調査の方法と概要.....	9
1 調査の方法.....	9
2 基本層序.....	10
第2章 調査の成果.....	13
第1節 繩文時代の遺構と遺物.....	13
1 陥穴.....	13
2 遺構外出土の遺物.....	13
第2節 弥生時代の遺構と遺物.....	14
第3節 その他の遺構と遺物.....	31
1 溝状遺構.....	31
2 遺構外出土の遺物.....	33
第3章 総括.....	34

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2	第15図 SS-004	22
第2図 房総半島の地質概況.....	3	第16図 SS-005	23
第3図 九十九里浜平野における砂堤群.....	4	第17図 SS-006	23
第4図 遺跡周辺の表層地質図.....	5	第18図 SS-007	24
第5図 調査範囲及び調査歴.....	6	第19図 SS-008 (1)	26
第6図 グリッド分割図.....	9	第20図 SS-008 (2)	27
第7図 基本層序.....	10	第21図 SS-009	28
第8図 遺構全体図.....	11	第22図 SS-010	29
第9図 SK-001及び遺構外の遺物	13	第23図 SS-011	30
第10図 SS-001 (1)	16	第24図 SD-001 (1)	31
第11図 SS-001 (2)	17	第25図 SD-001 (2)	32
第12図 SS-002 (1)	18	第26図 遺構外出土の遺物.....	33
第13図 SS-002 (2)	19	第27図 調査範囲.....	35
第14図 SS-003	21		

表目次

第1表 方形周溝墓一覧表…………… 14

図版目次

卷頭図版 1	図版10 SS-006完掘・南東溝セクション・調査風景・ 南東溝完掘
卷頭図版 2	図版11 SS-007完掘・北東溝セクション・北西溝遺 物出土状況・北東溝完掘
図版 1 道庭跡航空写真	図版12 SS-008完掘・南西溝セクション・南東溝 セクション・北東溝セクション・北西溝セ クション
図版 2 調査前風景・方形周溝墓完掘全景	図版13 SS-008埋葬施設セクション・主体部完掘 ・南西溝遺物出土状況・北東溝完掘・南東 溝完掘
図版 3 下層セクション・SK-001完掘・SS-001完掘・ SS-001北東溝セクション・SS-001南東溝 セクション	図版14 SS-008南西溝完掘・北西溝完掘・SS-009 完掘
図版 4 SS-001南西溝セクション・北西溝セクショ ン・第1埋葬施設完掘・第2埋葬施設完掘・ 南東溝完掘・南西溝完掘・北西溝完掘	図版15 SS-009南東溝セクション・南西溝セクショ ン・北東溝完掘・南西溝完掘・南東溝完掘
図版 5 SS-002完掘・北東溝セクション・南東溝 セクション・南西溝セクション・北西溝セ クション	図版16 SS-010完掘・南西溝セクション・北西溝 セクション・南西溝遺物出土状況・北西溝 遺物出土状況
図版 6 SS-002主体部完掘・埋葬施設完掘・北東 溝遺物出土状況・南東溝完掘・南西溝完掘・ 北西溝完掘	図版17 SS-010北西溝完掘・SS-011北西溝・ SD-001完掘・SD-001完掘・SD-001・ SS-011北西溝完掘・SD-001セクション
図版 7 SS-003完掘・南東溝セクション・南西溝 セクション・南西溝遺物出土状況	図版18 遺物SS-001～SS-010・SD-001・縄文遺構 外・弥生遺構外・中・近世遺構外
図版 8 SS-004完掘・SS-004北東溝・SS-006南西 溝完掘・SS-004南東溝・SS-009北西溝完 掘	
図版 9 SS-004南西溝セクション・北西溝セクショ ン・南西溝完掘・北西溝完掘・南東溝セク ション・SS-005完掘	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯と経過

千葉県立農業大学校は、東金市に本部を置く専修学校である。千葉県唯一の農業者研修教育施設として、昭和54年の開校以来、3,000名を超える卒業生を社会に送り出している。千葉県農林水産部扱い手支援課は、農業大学校敷地内に新たに出荷調製施設の建設を計画し、令和元年度に「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」の協議文書を千葉県教育委員会へ提出した。翌年度に千葉県教育委員会は、事業地全域に「道庭遺跡」が所在する旨を回答した。

この事業計画の実施に当たり、関係機関と協議を行った。工事を行う場所は「周知の埋蔵文化財包蔵地」（道庭遺跡）の範囲内にあり、過去の発掘調査でも多数の遺構が検出されていることから、事業地内に遺構が広がることが予想された。これを受け、関係機関による協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

令和3年度に発掘調査を実施し、令和4年度に整理作業を実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は下記のとおりである。

○令和3年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 田中文昭 文化財課副課長 高梨俊夫 発掘調査班長 吉野健一

担当者 文化財主事 鈴木彩奈

実施期間 令和3年8月2日～令和3年11月30日

内容 調査対象面積1,100m² 確認調査 上層1,100m² 下層24m²

本調査 上層1,100m² 下層0m²

○令和4年度

文化財課長 金井一喜 文化財課副課長 四柳隆 発掘調査班長 黒沢崇

担当者 主任上席文化財主事 蜂屋孝之・文化財主事 鈴木彩奈

実施期間 令和4年6月1日～令和4年10月31日

内容 水洗注記～報告書刊行

第2節 遺跡の位置と周辺の環境

1 地形と地質（第1～4図、図版1）

東金市は千葉県の東部に位置し、北は山武市、東は九十九里町、南は大網白里市、西は千葉市、八街市に接する面積約89km²、人口約6万人の地方拠点都市である。本遺跡は下総台地の東端に位置する台地上にある。この台地はほぼ独立しており、三方を谷に、南東側は縄文海進（有楽町海進）期に海食により形成された海食崖の急峻な地形となっている。台地の面積は約25万m²に及び、標高約50m前後の平坦な台地で、周辺の台地と比べて、ほぼ全域が平坦な地表面を呈しているという、この台地ならではの特徴がある。大規模な台地整形が行われた可能性は、検出された遺構群の状況からほとんどないと言える。現在でも、農業大学校の演習場として畑地となっている部分がほとんどで、平坦な台地が立川ロームの堆積以降変わら



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

0 (1 : 25,000) 2 km

ことなく続いてきたようである。なお、台地上の古墳については、ほぼ墳丘が失われており、後世の削平によることは間違いない。台地の北側は、太平洋に注ぐ作田川の支谷が入り込み、台地の南西側はやはり太平洋に注ぐ真亀川の支谷が入り込んでおり、わずかに北側で隣接する台地とつながっている。台地斜面の傾斜は顕著で、南東側の海食崖はさらに切り立った断崖となっており、標高7メートル前後の低地との比高は40m以上にもなっていることから要害の地といえるような地形を呈している。

本台地の地質的環境について概観すると、房総半島の地質は、第四紀の上総層群及び下総層群からなる丘陵と下総層群及び新期段丘堆積層からなる段丘と沖積層からなる低地で構成されている（第2図）。上総層群は房総半島中部以南の上総丘陵に広く分布する海成層で、その基底は房総半島をほぼ東西に横切る黒滝不整合によって分けられている。上総層群は房総半島の中・東部で最も厚く、下総層群は房総半島北部の下総台地に広く分布し、主に浅海性の砂層とそれに挟まれた淡水から汽水性の泥質層及び砂礫層から構成されている。本地域では、下位から上総層群前期の大田代層、梅ヶ瀬層、国本層、上総層群後期の柿の木台層、長南層、笠森層、金剛地層が分布し、その上部に下総層群である地蔵堂層、萩層、木下層が分布している。本台地の下部層となる上総層群は半固結堆積物で、北東部に位置する山武市浪切不動院の海食崖下にみられる固結した岩塊のように、縄文海進期に波に洗われて固結した金剛地層なども認められる場所がある。上部の成田層とも呼ばれる木下層は、下部層の下総層群と不整合関係にあり、金剛地層より上の地蔵堂層及び萩層を直接覆って堆積している。木下層は、上部に粘土が2m～数10cmの厚さで堆積し、それ以上は下末吉、武藏野、立川の各ローム層で覆われており、今回の調査でも、安定した立川ロームの堆積が台地上で確認されている。周辺の遺跡分布では、縄文時代の集落の発達は、極めて低調で、弥生時代中期後葉になってようやく集落が定着し、その後の古墳時代以降も継続していくようになる。その動静に大きな影響を及ぼしたのが、台地南東部一帯に広がる九十九里浜平野である。

九十九里浜平野は、北端の刑部岬から南端の太東崎に至る約60kmの九十九里浜を海岸線とし、幅10kmを擁する房総半島最大の沖積平野である。この平野が現れるのは、約6,000年前にピークとなった縄文海進（有楽町海進）が海退に転じた縄文時代前期黑浜式期以降のことであり、この平野とのかかわりは、遺跡の分布をみると、陸地化に伴う居住域の拡大としてではなく、食料資源の獲得の場として長らく推移するとみられる。この平野は、海岸線に平行して細長く伸びる比高数m内外の砂堆（砂が堆積した高まり）、砂堤（砂が堤防状に堆積した高まり）、砂丘（風によって運ばれた砂の高まり）などからなり、この列状の砂の高まりとその間の後背湿地と呼ばれる泥がちな列状の低地とが交互に現れる独特な地形を呈している。主要な河川は北から新川、栗山川、木戸川、作田川、真亀川、南白亀川、一宮川などであるが、いずれも低い丘陵や台地に源を発し、しかも流域面積の小さな河川で、平野を形成するのに十分な堆積物の供給源とはなっ

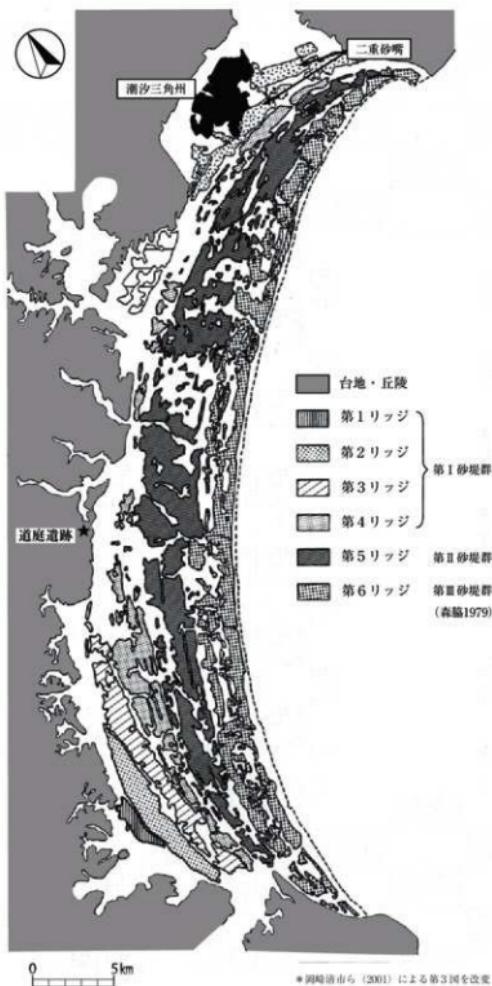


第2図 房総半島の地質概況

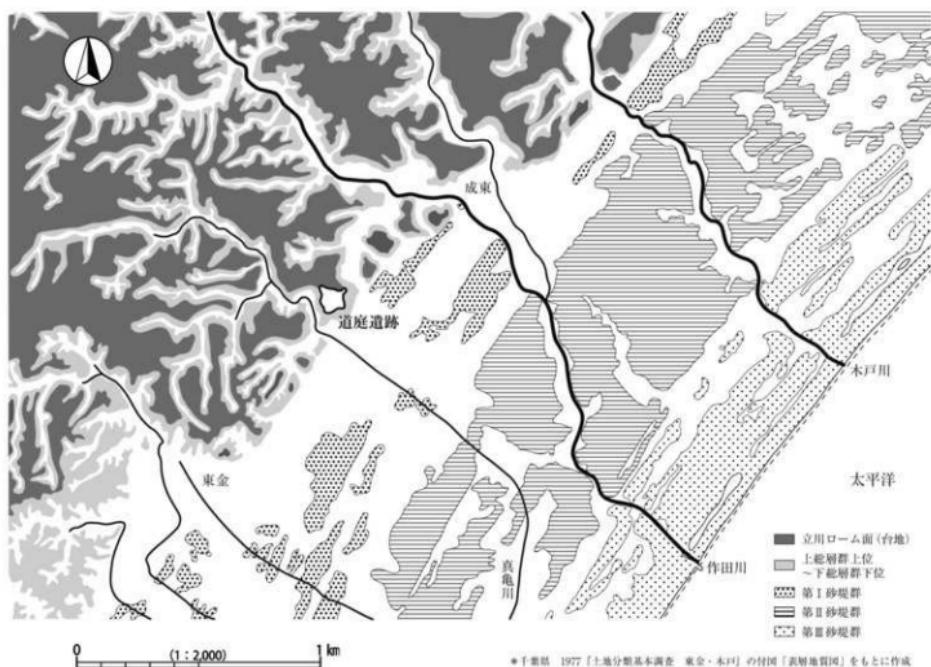
ていない。すなわち、九十九里浜平野の発達に河川は大きくかかわってはいないという事である。九十九里浜平野の発達に関する研究史としては、森脇 広の研究が知られている（森脇 1979）。森脇は、九十九里浜平野に広がる10数列の砂堤列を空中写真判読に基づいて、曲率、規模、堤間低地の発達度合によってⅠ群～Ⅲ群の砂堤群に区分している。この砂堤列については、岡崎清市らが行った迅速図の解析によれば、第3図に示したように第Ⅰ群がさらに4つに細分され、6群に分けられるという（岡崎 2001）。ただし、細分されたのは九十九里浜平野の南部区域で、道庭遺跡の下流域は森脇の3群の捉え方に変更はない。

森脇によれば、第Ⅰ砂堤群は、東金以北で河川沿いに比較的広い数列の砂堤がみられるほかは台地内の谷底平野の旧潟湖を背後にいただく比較的幅の狭い旧バリアが主体となっている。第Ⅰ砂堤群は遅くとも縄文中期には形成されていたようで、東金地域は第Ⅰ砂堤群の様相の異なる南北の境にあって最も第Ⅰ砂堤群の発達が低調な地域である。

第Ⅱ砂堤群の堆積時期は、縄文時代後期から第Ⅲ砂堤群が形成される始める古墳時代までとされており、道庭遺跡に集落が現れる弥生時代中期には、第Ⅱ砂堤群の姿がある程度認められる環境となっていたようである。第4図に道庭遺跡周辺の表層地質図を示した。道庭遺跡の眼下には低地が広がり第Ⅰ砂堤群がわずかに点在し、第Ⅱ砂堤群までは500m以上の距離がある。海退に転じた縄文時代前期黒浜式期には入り江となっていた作田川の谷底平野は、後期には汽水化した潟湖の環境となっていたと考えられる。第Ⅰ砂堤



第3図 九十九里浜平野における砂堤群



第4図 遺跡周辺の表層地質図

群の形成が進まなかった低地のエリアは、弥生の小海退期の段階でも海の影響を受けやすい環境が長く続
き、畦畔を伴うような水田の開発が行われた可能性は、第II砂堤群の形成が進んだ段階でも低かったので
はないかと推測される。

のことから、道庭遺跡の宮ノ台式期の集団が水田稲作を行える環境があるとすれば、台地北東部、作
田川の丘陵地内に広がる谷底平野ないしは、真亀川の支流の丘陵地内のわずかな谷底平野に限られていた
可能性が高い。弥生の小海退期の相対的海水面の低下により第II砂堤群の形成が進み、台地隣接エリアや
湖沼の淡水化が促され、第I、第II砂堤群上の腐食化が進行していく。途中、再び海水面の相対的な上昇
に伴い砂堤が前進しない時期もあるが、古墳時代に入る頃に海水面が上昇に転じ、現在に至る第III砂堤の
形成が始まるとされている。

九十九里浜に広がる沼沢地の淡水化が進んだとしても、古墳時代に至っても灌漑施設を伴う水田の大規
模な開発の可能性は低いものの、谷底平野を主体とする谷津田の経営と第I、第II砂堤上の畑作などを主
要な生産手段として次第に低地の土地利用が進んでいくのではないかと推測される。



2 道庭遺跡の調査歴と周辺の遺跡

調査歴（第5図）

本遺跡については、これまでに6度の発掘調査が行なわれている。昭和52年～54年にかけて行われた道庭遺跡調査会による調査では、約50,000m²が調査され、弥生時代中・後期の竪穴住居跡68軒、中期の方形周溝墓73基（溝中に土器棺墓11基）、木棺墓1基、土壙墓9基、土器棺墓1基、環濠1条が検出されており、太平洋岸を望むエリアにおける弥生時代環濠集落の存在が明らかになった。これらの遺構群のはかに古墳時代の竪穴住居跡や古墳群、平成4年度・9年度に行なわれた千葉県文化財センターによる調査では、竪穴住居跡6軒、方形周溝墓1基と遺跡調査会の調査時に検出されていた環濠の続きとみられる溝1条が検出されている。平成2年度・19年度・20年度には財團法人山武都市文化財センターによる確認調査が実施されており、合計で竪穴住居跡10軒、方形周溝墓2基が検出されている。これまでの成果をまとめると、中期～後期の竪穴住居跡は84軒、中期の方形周溝墓76基にも及んでいる。注目されるのは、V字溝を伴う環濠集落の集落域と方形周溝墓群からなる墓域が明瞭に画されていることである。東京湾東岸域の千葉・市原台と呼ばれる地域には弥生時代中期の環濠集落群が密集しているのに対して、九十九里浜平野を望む地域の大規模な弥生集落は、道庭遺跡のみであり稀有な存在といつても過言ではない。

周辺遺跡（第1図）

道庭遺跡の周辺には、多くの遺跡が確認されており、首都圏中央連絡自動車道やゴルフ場建設等に伴う発掘調査が行われ報告書が刊行されている。ここでは、時代ごとに周辺の遺跡について取り上げてみたい。

旧石器時代 当該時期の遺跡の数は限られており、本遺跡（1）のほか、原山之神遺跡（3）、栗焼棒遺跡（7）、八幡神社北遺跡（13）、久我台遺跡（22）などがある。複数の文化層が確認された遺跡もあるが、全体的にその規模は小さい。本遺跡では、Ⅲ層のブロック1か所が検出され、礫350点のほか細石刃等の石器が出土している。原山之神遺跡（3）では、Ⅹ層～X層にかけてのブロック1か所が検出され、台形石器や敲石等が出土している。栗焼棒遺跡（7）では、Ⅶ層下部～Ⅸ層のブロック1か所からナイフ形石器や楔形石器が出土したほか、Ⅸ層、Ⅸ層下部～X層上面、X層中位～XI層上面の各ブロックが検出されている。八幡神社北遺跡（13）では、Ⅸ層下部のブロック2か所から局部磨製石斧等が出土したほか、Ⅷ層主体、Ⅵ層主体、Ⅲ～V層の各ブロックが検出されている。久我台遺跡（22）では、Ⅲ層下部～IV層上面のブロック2か所から尖頭器やナイフ形石器等が出土したほか、Ⅸ層下部からX層上面、IV層～V層、IV層の各ブロックが検出されている。

縄文時代 本遺跡では、陥穴31基が検出されているほか、早期～晚期の土器が出土している程度である。周辺の遺跡についても、縄文時代各時期のある程度の規模の集落跡はほとんどみられない。原山之神遺跡（3）・道塚遺跡（4）・小田山遺跡（5）などでは、遺構は検出されていないものの早期の包含層が確認され、撲糸文系土器等が出土している。古内遺跡（6）では、陥穴3基が検出されている。栗焼棒遺跡（7）では、陥穴10基のほか、袋状土坑1基などが検出されている。八幡神社北遺跡（13）では、陥穴4基が検出されている。小破片ではあるが、早期～後期までの土器が出土している。八幡神社南遺跡（14）では、陥穴5基が検出され、久我台遺跡（22）では、17基の陥穴と1基の袋状土坑が検出されている。

弥生時代 道庭遺跡の北東側、谷を挟んだ台地上に八幡神社南遺跡（14）、台地緩斜面に八幡神社北遺跡（13）がある。八幡神社南遺跡（14）では中期の竪穴住居跡8軒、方形周溝墓3基、八幡神社北遺跡（13）では中期の竪穴住居跡2軒が検出されている。また、真亀川を挟んで道庭遺跡の南西側に位置する独立丘陵

には、平蔵台遺跡(18)がある。トレントによる確認調査で多くの遺構、遺物が確認されている。調査が行われたトレントからは、弥生時代中期の竪穴住居跡4軒が検出されている。平蔵台遺跡(18)の谷を挟んだ西側に位置する台地上には久我台遺跡(22)があり、弥生時代の遺構は検出されかったものの、わずかながら後期の土器片が出土している。弥生時代の遺跡数はあまりないが、境川上流域の成東地域に偏る傾向にあるようだ。微高地や砂丘上でも弥生時代の遺跡が確認されている。道庭遺跡が所在する台地の西側を流れる真亀川周辺の砂堤上に小又遺跡(15)がある。調査歴がなく詳細不明だが、後期の土器が確認されているようである。成東川周辺の砂堤上にある湯坂遺跡(9)でも後期の土器が確認されているようである。このほかにも、調査歴がないため詳細は不明だが、作田川、真亀川、南白亀川沿いの砂堤上に弥生時代の遺物の散布が確認されているものの遺構の検出例はなく、九十九里浜平野における土地利用の難しさを反映していると考えられる。

古墳時代 台地上には6世紀代から集落が急増し、多くの遺跡が確認できる。集落としては、本遺跡のほか、古内遺跡(6)、栗焼棒遺跡(7)、湯坂遺跡(9)、八幡神社北遺跡(13)、八幡神社南遺跡(14)、平蔵台遺跡(18)、妙経遺跡(20)、久我台遺跡(22)、井戸向遺跡(23)、東金黒田遺跡(24)、海老ヶ谷遺跡(25)などがある。本遺跡では、前・中期125軒、後期84軒の竪穴住居跡が検出されており、後期分については未報告であることから詳細不明である。古内遺跡(6)では、7世紀代の竪穴住居跡4軒が検出されている。栗焼棒遺跡(7)では、7世紀初頭から中葉の竪穴住居跡50軒が検出されている。湯坂遺跡は集落の開始時期が古く、前期7軒のほか、中期および後期の竪穴住居跡も少数ながら検出されている。八幡神社北遺跡(13)では、6世紀後半～7世紀代の竪穴住居跡68軒が検出されている。八幡神社南遺跡(14)は、ほかの周辺遺跡に比べ集落の開始時期が早く、5世紀末～6世紀代の竪穴住居跡23軒が検出されている。平蔵台遺跡(18)については、弥生時代の項でも触れたように、詳細不明の部分が多いが、後期の竪穴住居跡が2軒検出されたようである。妙経遺跡(20)では、後期の竪穴住居跡が48軒検出された。久我台遺跡(22)では、6世紀中葉～7世紀後半の竪穴住居跡が89軒検出されている。東金黒田遺跡(24)では、竪穴住居跡57軒が検出されている。海老ヶ谷遺跡(25)では、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡が155軒調査されている。6世紀中葉から長期にわたり集落が継続的に営まれている。井戸向遺跡(23)でも、後期の竪穴住居跡が検出されている。

集落の増加とともに、古墳も急増する。主な古墳群としては、本遺跡内に道庭古墳群、不動塚、西ノ台、駄ノ塚という首長墓クラスの古墳を有する板附古墳群(8)や、森台古墳群(2)、湯坂古墳群(10)、天野古墳群(11)、家之子古墳群(12)などがある。道庭古墳群では、遺跡調査会によって26基が確認されたというが、詳細不明である。分布調査のみで発掘調査歴はない森台古墳群Ⅲ群(2)は、4つに分けられた支群のひとつで、円墳17基が確認されている。I群は調査歴があり、前方後円墳から埴輪が出土している。湯坂古墳群(10)では、前方後円墳2基と円墳22基が確認されている。天野古墳群(11)では、昭和33年の分布調査で円墳7基が確認されている。家之子古墳群(12)では、分布調査の結果前方後円墳1基、円墳29基、方墳1基が確認されている。前方後円墳1基、円墳5基、方墳1基は調査されており、横穴式石室から須恵器片等が出土している。また、縄文海進期に発達した海食崖には、横穴墓も多く築造されている。玉崎神社裏横穴群(28)、上行寺裏横穴群(29)、新宿横穴群(30)、岩崎横穴群(31)等の横穴群が確認できる。玉崎神社裏横穴群(28)では、計12基が調査され、山武郡域では最古となる6世紀代の遺物が出土している。奈良・平安時代 最も遺跡数が多く、普遍的にみられるようになる。古墳時代後期に始まり、当該時期ま

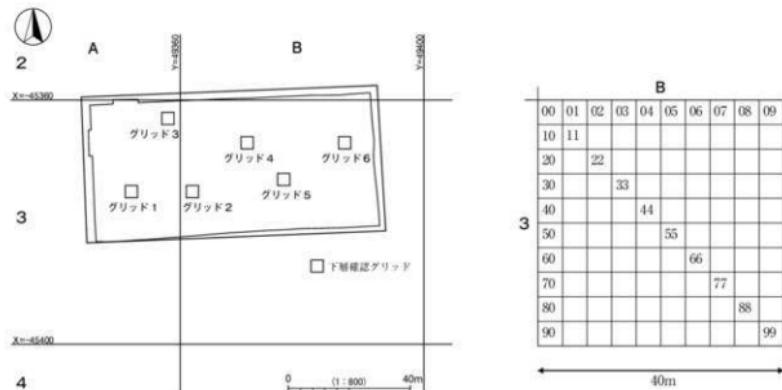
で継続する集落がほとんどである。本遺跡のほか、原山之神遺跡(3)、古内遺跡(6)、栗焼棒遺跡(7)、湯坂遺跡(9)(8)、家之子馬場遺跡、中谷遺跡、八幡神社南遺跡(14)、八幡神社北遺跡(13)、妙経遺跡(20)、久我台遺跡(22)、井戸向遺跡(23)、東金黒田遺跡(24)、海老ヶ谷遺跡(25)、家之子中台遺跡(16)などがある。本遺跡では、遺跡調査会調査分が未報告のため詳細不明だが、竪穴住居跡が120軒検出されている。また、その後の調査でも、竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡4棟、土坑44基などが検出されており、弥生時代に留まらず、大きな集落跡といえる。原山之神遺跡(3)では、7世紀代の竪穴住居跡1軒を検出した。古内遺跡(6)では、3軒の竪穴住居跡が検出されている。栗焼棒遺跡(7)では、竪穴住居跡13軒のほか、大型の掘立柱建物跡3軒や溝状遺構5条が検出されている。八幡神社北遺跡(13)では、8世紀～9世紀の竪穴住居跡27軒のほか、掘立柱建物跡12棟が検出されている。八幡神社南遺跡(14)では、8世紀～9世紀の竪穴住居跡14軒のほか、掘立柱建物跡3棟などが検出されている。妙経遺跡(20)では、7世紀末～10世紀前半にかけての72軒の竪穴住居跡が検出されている。久我台遺跡(22)では、7世紀末～11世紀にかけての134軒にも及ぶ竪穴住居跡や7棟の掘立柱建物跡が検出されている。海老ヶ谷遺跡(25)・井戸向遺跡(23)でも、竪穴住居跡が複数検出されている。東金黒田遺跡(24)では、竪穴住居跡83軒を検出した。湯坂遺跡(9)では、検出された竪穴住居跡はごくわずかであるが、基壇、瓦が確認されており廃寺跡と考えられている。調査歴はないものの、家之子中台遺跡(16)や御林遺跡(26)、北新田遺跡(27)など遺物の散布が確認されている低地遺跡もある。

中世 酒井氏の居城と伝わる東金城跡(32)のほか、田間城跡(19)、平蔵台城跡(17)、久我台城跡(21)等の城郭跡、城館跡が複数存在する。これらの遺跡では、郭や腰曲輪などが検出されている。また、土坑群、地下式坑、溝状遺構等の遺構群を伴った久我台遺跡(22)や八幡神社北遺跡(13)等がある。

第3節 調査の方法と概要

1 調査の方法(第6・8図、図版2)

発掘調査に当たっては、世界測地系(第IX座標系)の公共座標に基づくグリッド設定を行った。グリッド



第6図 グリッド分割図

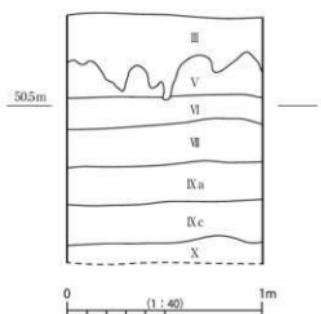
ドの基準は道庭遺跡の位置する X=-45,280, Y=39,320 を起点とし、40m×40m の方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は北から南へ 1・2・3・西から東へ A・B とした。大グリッドは更に 4m×4m の小グリッドに 100 分割し、北西隅を 00、南東隅を 99 とした。大グリッドと小グリッドを組み合わせて、1A-01 や 2B-00 等と呼称した。今回報告する調査範囲は X=-45,320, Y=49,320 の 2A 大グリッド～3B 大グリッドの範囲に所在する。

道庭遺跡は、過去の調査で弥生時代の環濠集落と方形周溝墓群、古墳時代の堅穴住居跡群が検出されており、今回の調査範囲は過去の調査成果から、方形周溝墓群の一角にあたることが予想された。そのため、上層は全城の表土を重機により除去し、確認調査を実施した。その結果、全城で弥生時代の方形周溝墓が検出されたため、全城を対象に本調査を実施することとなった。立川ロームにおける旧石器時代の下層確認調査は、公共座標に沿って 2m×2m のグリッドを 6か所設定して実施した。遺物の出土がなかったことから、確認調査で終了した。記録作成のうち全体図と遺構平面図の実測図面は、平板測量で行った。写真撮影はデジタルカメラ (RAW+JPEG データ) により実施した。本調査に当たっては、遺構種類ごとに記号を付けた。方形周溝墓は SS、土坑は SK、溝は SD とし、種類記号ごとに 3 衍の通し番号と合わせて SS-001 のように遺構番号として表記した。遺物は遺構ごとに、遺構外から出土した遺物については小グリッド単位で通し番号を付けて取り上げた。第 8 図に、検出した遺構の全体図を示した。

整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物の種別・器種分類を行ってから接合・復元作業を実施した。実測・拓本、遺物写真撮影を行った。発掘調査で作成した図面・写真等の記録整理を行った後、挿図・写真図版原図を作成し、それらをもとにデジタル編集による挿図・写真図版を作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行に至った。また、報告書編集中に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

2 基本層序 (第 7 図)

道庭遺跡が立地する台地の基本層序は以下のとおりである。下層確認グリッド 5 の北壁の断面図を図示した。

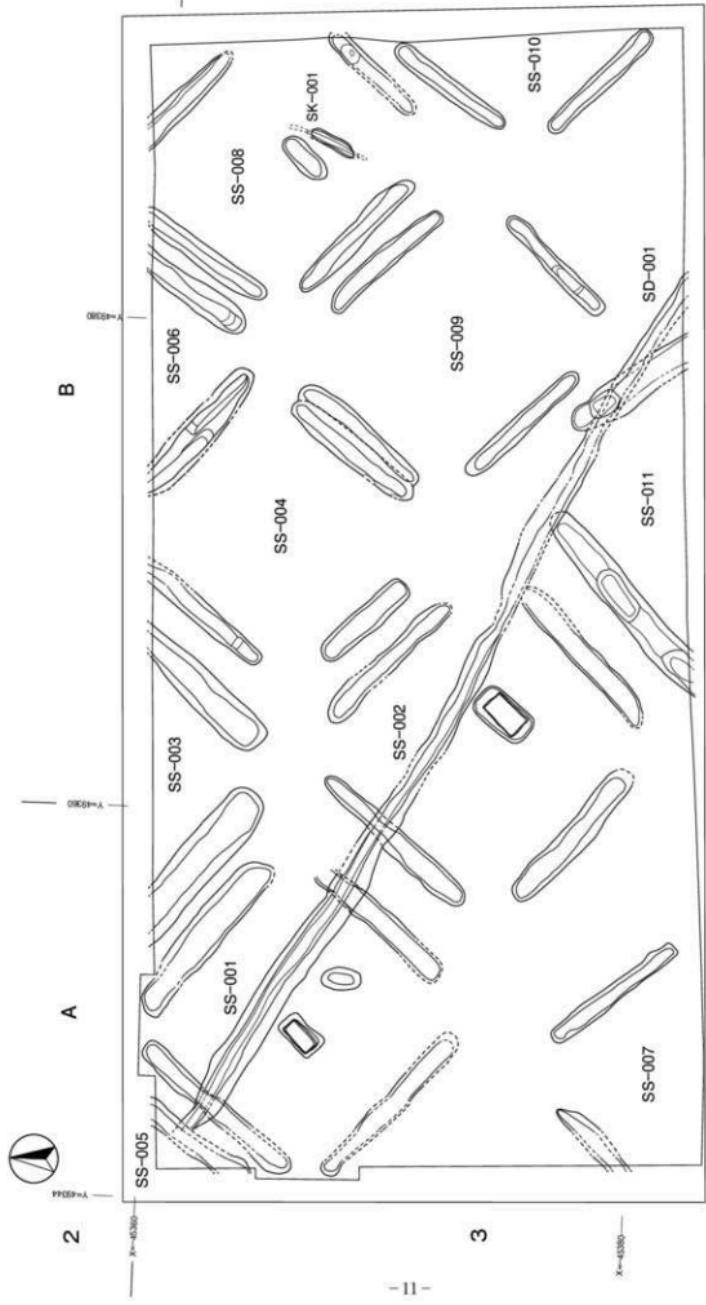


- I 層 表土層である。図示していないが約 40cm の耕作土である。
- II 層 下部台地で一般的な礫文時代以降の漸移層であるが、調査区内では耕作土に取り込まれ、ほぼ失われていた。
- III 層 褐色土層。立川ローム最上層のいわゆるソフトローム層である。
- IV～V 層：褐色のハードローム層である。しまりはやや強い。クラック状にソフトローム化が進行している。V 層は第 1 黒色帯とされており本来やや暗い色調となるが、色の違いが識別しにくい。
- VI 層 褐色のハードローム層である。始島丹沢バミス (A.T.) を多く含み、乾くと全体が白っぽく見える。しまりが強い。
- VII 层 褐色のハードローム層である。上部には、日暮山系の A.T. を含む。
- Ka 層 第 2 黑色帯の上部である。褐色のハードローム層だが、Ⅶ 層や X 層など上下の層に比べやや暗い色調で、赤色のスコリアを多く含む。
- Kc 層 第 2 黑色帯の下部である。褐色のハードローム層だが、Ⅶa 層よりもスコリアがやや大きくなる。目立つ。
- X 層 立川ローム最下層となる。褐色のハードローム層である。しまりは強く、スコリアなどの含有物が捉えられない。

第 7 図 基本層序

1 : 700
10m

第8図 道標全体図



参考文献

- 財山武郡市文化財センター 1991「小野城跡・道庭遺跡」『平成2年度 東金市内遺跡発掘調査報告書』
- 財千葉県文化財センター 1994「東金市妙経遺跡・戸戸谷9号墳」千葉県文化財センター調査報告第246集
- 財千葉県文化財センター 2006「両総農業水利事業第3揚水機場建設工事埋蔵文化財調査報告書1 山武郡成東町八幡神社 南(1)遺跡・山武郡成東町八幡神社南(2)遺跡」千葉県文化財センター調査報告第528集
- 岡崎清市・砂村兼夫 2001「明治中期迅速図からみた九十九里浜平野の砂質微高地列の区分の再検討」『季刊地理学』Vol53
- 小高春雄ほか 1983「道庭遺跡・道庭遺跡調査会
- 小高春雄 2006「山武の城」小高春雄
- 小高春雄 2003「10道庭遺跡」千葉県の歴史 資料編 考古2 千葉県
- 財千葉県文化財センター 1997「千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書1—山武町栗焼棒遺跡—」千葉県文化財センター調査報告第330集
- 財千葉県文化財センター 1998「千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書2 東金市大谷台遺跡他18遺跡」千葉県文化財センター調査報告第331集
- 財千葉県文化財センター 1994「東金市道庭遺跡」千葉県文化財センター調査報告第248集
- 黒沢崇ほか 2009「両総農業水利事業第3揚水機場建設工事埋蔵文化財調査報告書2 山武郡成東町八幡神社北(1)・(2)・(3)遺跡」千葉県文化財センター調査報告第608集
- 財千葉県文化財センター 2013「東金市玉崎神社裏横穴群」千葉県文化財センター調査報告第698集
- 千葉県教育委員会 2014「東金市玉崎神社裏横穴群2」千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告3
- 建設省国土地理院 1987「土地条件調査報告書(東金・茂原地区)」国土地理院技術資料D・2-No40
- 財千葉県文化財センター 1998「東金市道庭遺跡」千葉県文化財センター調査報告第332集
- 東金市教育委員会 2008「道庭遺跡(39-3地点)」「平成19年度 東金市内遺跡発掘調査報告書」
- 東金台遺跡調査団 1980「東金台遺跡1」
- 湯坂遺跡発掘調査団 1971「千葉銀山武郡成東町湯坂遺跡発掘調査概報」
- 千葉県 1977「土地分類基本調査 東金・木戸」
- 遠山成一 1998「東金酒井氏の居城－東金城について－中世城郭の資料化にあたっての一前提－」『中世城郭研究』第2号 中世城郭研究会
- 財千葉県文化財センター 1989「千葉県中近世城跡研究調査報告書第9集－東金城跡・城山城跡発掘調査報告－昭和63年度」
- 財千葉県文化財センター 1988「東金市久我台遺跡」千葉県文化財センター調査報告第137集
- 財鶴南文化財センター 1998「東金台遺跡Ⅱ」鶴南文化財センター調査報告第39集
- 平岡和夫 1975「湯坂古墳群」成東町教育委員会
- 平岡和夫 2000「千葉県九十九里地域の古墳研究Ⅲ」
- 財山武郡市文化財センター 1997「森台遺跡群(北野文群)」財山武郡市文化財センター発掘調査報告書第40集
- 古谷尊彦 1996「第1節 地形環境」「千葉県の歴史 別編 地誌1(総論)」千葉県
- 千葉県教育委員会 1970「東金平蔵台遺跡 発掘調査概報」
- 森脇 広 1979「九十九里浜平野の地形発達史」「第四紀研究」181
- 吉田章一郎ほか 1983「千葉県山武町森台古墳群の調査」青山学院大学森台遺跡発掘調査団
- 渡辺修一・高花宏行 2003「3 生産活動と人々の生活」「千葉県の歴史 資料編 考古2(弥生・古墳時代)」
- 財山武郡市文化財センター 1994「古内遺跡」財山武郡市文化財センター発掘調査報告書第20集
- 財山武郡市文化財センター 2005「財团法人山武郡市文化財センター 年報No.20 平成15年度」
- 東金市教育委員会 2009「道庭遺跡(38-9地点)」「平成20年度 東金市内遺跡発掘調査報告書」
- 財千葉県文化財センター 1998「千葉県埋蔵文化財分布図(2)－香取・海上・匝瑳・山武地区(改訂版)－」

第2章 調査の成果

第1節 繩文時代の遺構と遺物

調査区の北東側で陥穴1基が検出されている。また、遺物は遺構外から石鎚が1点出土しているほかは、土器類の出土はなかった。最も古い調査会による調査報告では、縄文時代の堅穴住居跡などの検出例はなく、陥穴と遺物包含層が若干検出されているに過ぎない。下総台地で通常みられるII層が後世の耕作などの影響によりほとんど失われていることも、縄文時代の痕跡を希薄にしている可能性があるが、周辺遺跡でもふれたように、九十九里浜平野に面する台地上の縄文時代遺跡自体が地域的に少ないのでこの地域の特徴である。東金市養安寺遺跡のような中期の貝塚や後・晩期の集落跡のような拠点となる遺跡がごく限られている点は、縄文海進以後の九十九里浜平野の発達があったとはいえ、東京湾東岸域のような漁労活動に適した環境がほとんど形成されていないことを示しているといえるだろう。

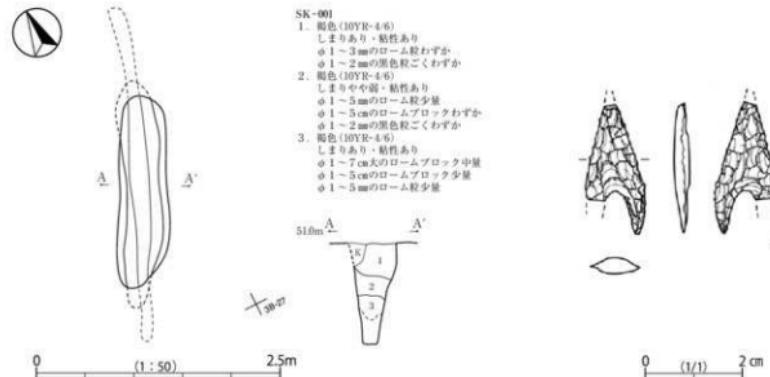
1 陥穴

SK-001 (第9図、図版3)

3B-16・17グリッドに所在する。平面形は長楕円形で、長軸方向はN-21°-Eである。規模は、長軸長1.96m、短軸長0.49mで、確認面からの深さは1.01mである。短軸方向の断面形はV字形である。覆土は全体に褐色で、ローム混じりの層である。遺物は出土しなかったが、千葉県内で一般的に見られる溝状の細いタイプの陥穴であることから、縄文時代早期の古い段階のものである可能性が高い。

2 遺構外出土の遺物 (第9図、図版18)

石鎚1点が出土している。1はSS-003の周溝覆土中から出土した珪質頁岩製の石鎚である。先端部および左脚部を欠損している。四基で脚部の湾曲する円脚鎚である。先端部と脚部には、衝撃剥離の痕跡がみられる。帰属時期として、草創期後半の可能性が高い。



第9図 SK-001及び遺構外の遺物

第2節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構では、方形周溝墓11基が検出されている。これまでの調査で明らかとなっている弥生時代の遺構群の墓域に相当するエリアにあり、全て四隅を掘り残した4つの溝からなる方形周溝墓である。これまでの調査で検出されているタイプと同じ形態のものである。過去の調査で検出された方形周溝墓において一部の溝が重複する例は、北東群の方形周溝墓にわずかに見られる程度であった。今回の調査では、周溝の一つがほぼ重複するものと切り合うものが確認されている。その他検出された周溝墓は切り合うことなく、N-38°～51°-Eのはば共通した主軸方向で整然と並んで構築されていることが確認できる。3基の方形周溝墓から、埋葬施設が検出されている。遺構の時期を決定できるような出土遺物は少なく、周溝内から遺物が出土したのはわずか4基で、器形を残す個体は壺に限られている。周溝の覆土から滑石製の勾玉2点が出土していることが特筆される。

なお、方形周溝墓の主軸方位は、埋葬施設の長軸方向を基準とし、埋葬施設のないものは、あるものに準じて計測した。検出した11基の方形周溝墓の計測値を第1表に掲載した。

第1表 方形周溝墓一覧表

()は推定値、< >は現存値

遺構番号	位 置	主軸方向	規 模 (m)			辨認番号	備 考	
			全 体	周溝長軸	周溝最大幅			
SS-001	3A-06・09・16～19・26・29・37・38	N-37°-E	11.6×11.2	北東溝 <6.2>	7.7 1.1	1.5 0.27～0.32	第3・4回	埋葬施設2基
				南東溝 <7.8>	(7.8)	0.8 0.14～0.31		
				北西溝 <7.8>	7.8	0.9 0.35～0.41		
SS-002	3A-29・39・49・3B-10・11・20・22・30・32・40・41	N-37°-E	11.5×11.8	北東溝 <6.1>	(6.8)	0.8 0.07～0.28	第5・6回	埋葬施設1基
				南東溝 <7.0>	6.8 (7.0)	0.9 0.10～0.41		
				北西溝 <5.7>	7.6	1.0 0.10～0.40		
SS-003	3A-08・09・19・3B-00・01・10	N-47°-E	—	北東溝 <6.0>	—	—	第7回	—
				南東溝 <6.3>	(6.0)	1.4 0.24～0.75		
				北西溝 <5.7>	—	—		
SS-004	2B-92・3B-01～04・11・14・21～24	N-38°-E	10.7×9.9	北東溝 <6.0>	6.2	0.8 0.07～0.46	第8・9回	SS-006～SS-009よりも新しい
				南東溝 <5.7>	4.6	1.2 0.24～0.34		
				北西溝 <5.7>	—	1.0 0.30～0.66		
SS-005	3A-06・16	N-37°-E	—	北東溝 <4.2>	—	—	第9回	調査会No.33号方形周溝墓の一部 南東溝・北西溝は調査会データによる
				南東溝 <10.0>	—	0.9 0.35～0.40		
				北西溝 <3.4>	9.0	1.1 0.20～0.45		
SS-006	2B-93～95・3B-03～05	N-37°-E	—	北東溝 <4.6>	—	—	第10回	SS-004より古い
				南東溝 <5.7>	—	12 0.24～0.62		
				北西溝 <3.4>	—	—		
SS-007	3A-46～48・58	N-47°-E	—	北東溝 <4.3>	6.2	0.8 0.13～0.34	第11回	—
				南東溝 <4.3>	—	—		
				北西溝 <3.4>	—	—		
SS-008	2B-95～97・3B-04～07・15～17・25～27	N-37°-E	9.9×11.0	北東溝 <4.3>	—	0.8 0.16～0.44	第12～14回	埋葬施設1基
				南東溝 <6.4>	—	0.9 0.17～0.50		
				北西溝 <5.6>	—	0.9 0.27～0.55		
SS-009	3B-13～15・23～26・33～36・44・45	N-47°-E	12.6×9.6	北東溝 <5.9>	—	0.9 0.12～0.24	第14～15回	SS-004より古い
				南東溝 <6.1>	—	0.8 0.18～0.41		
				北西溝 <6.0>	—	0.9 0.11～0.46		
SS-010	3B-27・37・47・48	N-47°-E	—	北東溝 <5.5>	—	—	第16～17回	—
				南東溝 <5.8>	—	—		
				北西溝 <5.5>	—	—		
SS-011	3B-41～44・51～55	N-37°-E	—	北東溝 <4.5>	—	—	第17回	—
				南東溝 <4.5>	—	—		
				北西溝 <4.5>	—	—		

SS-001 (第10・11図、図版3・4・18)

位置・規模 3A-06～09・16～19・26～29・37・38グリッドに所在し、北西溝と南東溝が溝SD-001によって一部壊されている。規模は11.6m×11.2m、方台部の規模は92m×92mではほぼ正方形を呈している。主軸方向はN-43°-Eである。

埋葬施設 方台部の中央付近で埋葬施設とみられる土坑を2基検出した。ほぼ中央に位置する第1埋葬施設の平面形は長方形を呈し、検出時に木棺の裏込めとみられるやや硬い覆土が周囲で検出され、中央に長方形の主体部が検出されている。木棺直葬とみられる主体部は長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.21mの規模で、掘り方の規模は、1.82m×0.94mである。その東側に位置する第2埋葬施設は、不整規円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.94m、深さ0.31mである。断面はU字状を呈し、底面には平らな部分が少ない。断面に棺の痕跡などは確認できなかった。

周溝 周溝は部分的に擾乱を受けており、各周溝の規模は、北東溝7.7m×1.5m、深さ0.24m～0.28m、南東溝6.2m×1.1m、深さ0.27m～0.32m、南西溝7.8m×0.8m、深さ0.14m～0.31m、北西溝7.8m×0.9m、深さ0.35m～0.41mである。各周溝の壁は、直に掘り込まれている。また、周溝幅はそれでは一定の幅を呈するが、統一性のある共通した幅を呈しているわけではない。4つの周溝の底面のレベルは一定していない。北東溝の底面は、他の周溝に比べて浅くⅢ層のいわゆるソフトローム層までである。一方、北西溝は掘込みがⅣ層のハードローム層に及んでおり他の周溝よりも深くなっている。

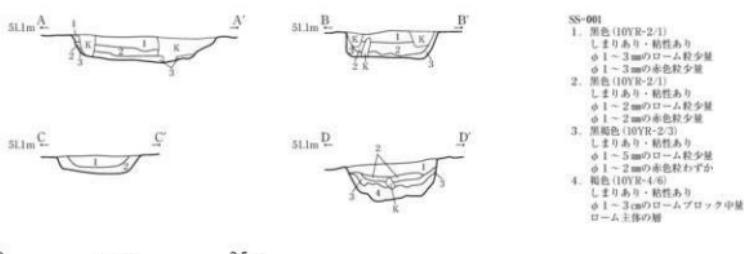
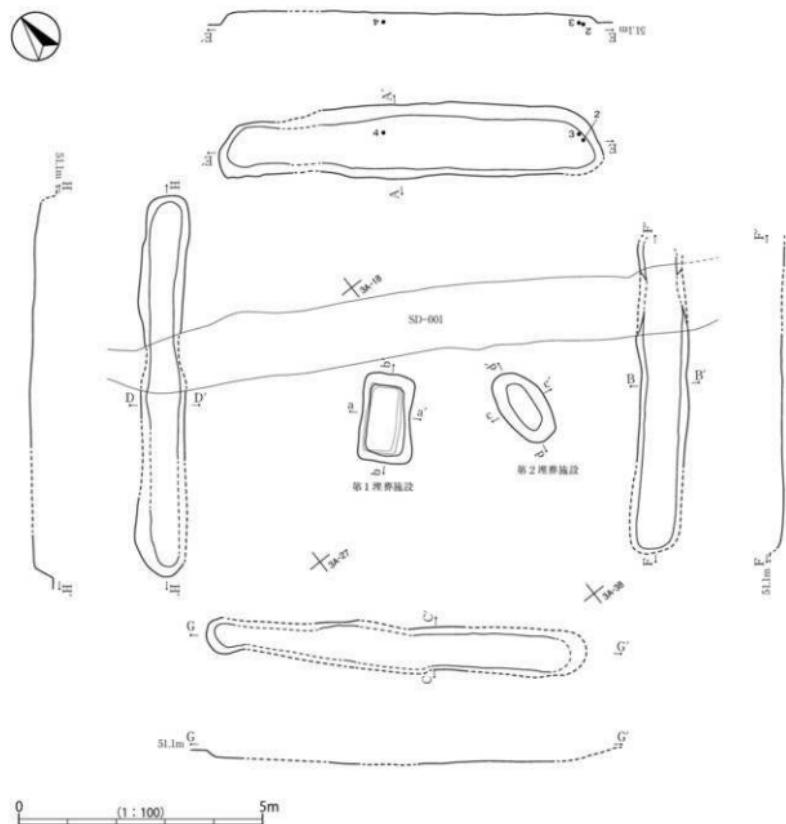
出土遺物 弥生土器片が北東溝および南西溝の覆土中から出土している。小破片が多く4点を図示することができた。1は壺の頸部片である。外面調整はハケの痕跡が若干認められる。内面調整はナデである。胴部との境にLRの縄文が帯状に施される。2・3は壺の胴部片である。外面調整はハケ、内面調整はハラナデである。2には単節LRの横位の縄文帯が2段、3には3段確認できる。4は恐らく壺の底部片で、外面調整はハケ、内面調整はヘラナデである。

SS-002 (第12・13図、図版5・6・18)

位置・規模 3A-29・39・49・3B-10・11・20～22・30～32・40・41グリッドに所在し、北西溝と南東溝で溝SD-001と切り合う。周溝墓全体の規模は11.5m×11.8m、方台部の規模は9.5m×10.0mではほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-39°-Eである。

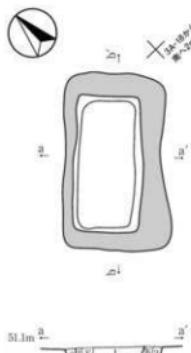
埋葬施設 方台部のやや南東寄りで埋葬施設とみられる土坑を1基検出した。埋葬施設の平面形は隅長丸方形で、裏込めと考えられるやや硬い土が周囲で確認され、中央が木棺直葬の主体部であったと推測される。掘り方は長軸2.6m、短軸1.4m、主体部は長軸1.7m、短軸0.9m、深さ0.20mの規模で、主体部の4つのコーナーは明瞭な直角を呈している。

周溝 部分的に溝SD-001によって一部が擾乱を受けている。各周溝の規模は、北東溝6.8m×0.8m、深さ0.26m～0.42m、南東溝6.1m×0.9m、深さ0.07m～0.28m、南西溝7.0m×1.1m、深さ0.10m～0.41m、北西溝7.6m×1.0m、深さ0.10m～0.40mである。各周溝の壁は、直に掘り込まれているが、周溝両端は緩やかに高まるものもある。また、周溝幅はそれでは概ね一定の幅を呈するが、統一性のある共通した幅を呈しているわけではない。また、周溝両端も半円形を呈するもののほか、やや尖るものなどがある。底面に若干の凹凸を伴う周溝があり、南西溝は一部がⅣ層のハードローム面に達しているが、大部分はⅢ層のソフトローム内の浅い掘り込みである。南東溝は一部擾乱によって検出できなかったが、掘り込みはⅢ層のいわゆるソフトローム内で底面となっている。



第10図 SS-001(1)

第1埋葬施設



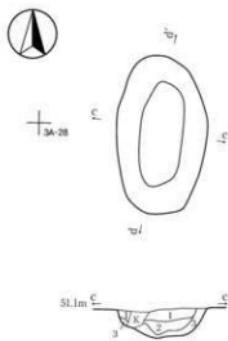
第1埋葬施設掘り方



SS-001 第1埋葬施設

- 褐色 (10YR-4/4)
しまりあり・粘性あり
 ϕ 1 ~ 5mmのローム粒わずか
- 褐色 (10YR-4/4)
しまりあり・粘性あり
（合土は入られない）
- 暗褐色 (10YR-3/2)
しまりあり・粘性あり
暗褐色土にローム (10YR-4/4) が混ざる
 ϕ 1 ~ 2mmのローム粒少量
 ϕ 1 ~ 3cmのロームブロック少量
木棺の表込めの上と考えられる

第2埋葬施設



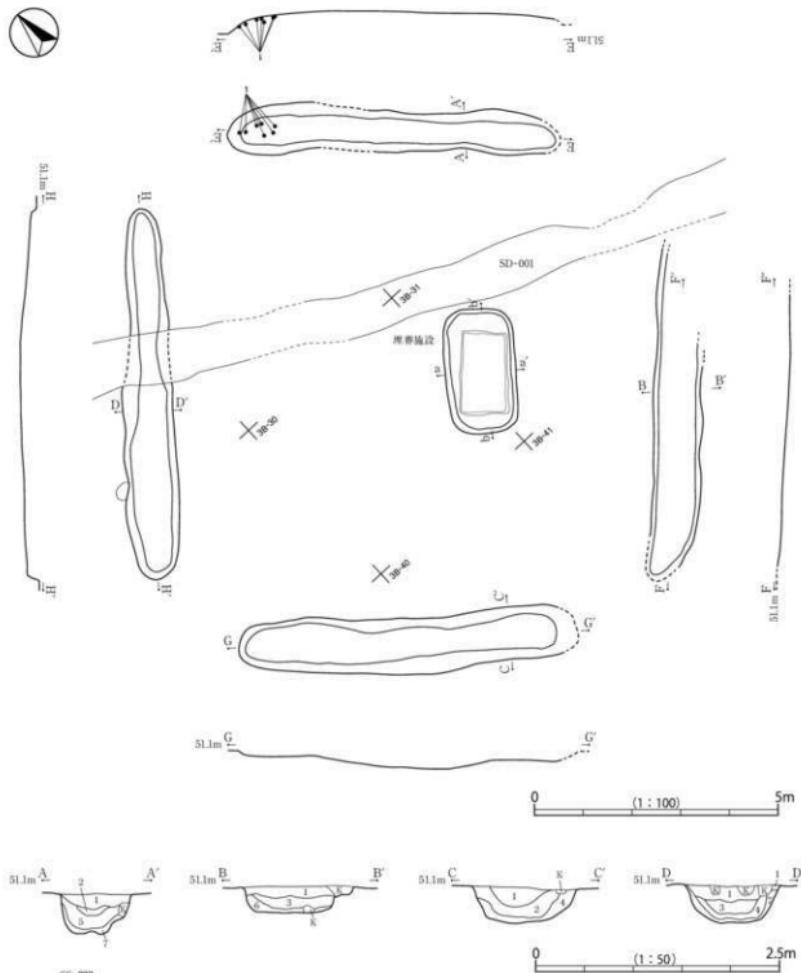
SS-001 第2埋葬施設

- 暗褐色 (10YR-4/3)
しまりあり・粘性あり
 ϕ 1mm以下・1mmより大きい
 ϕ 1mmの黒色粒少量
- 暗褐色 (10YR-3/2)
しまりあり・粘性あり
しまり・粘性とともに1層よりもやや強い
 ϕ 1 ~ 3mmのローム粒少量
- 褐色 (10YR-4/4)
しまりあり・粘性あり
しまり・粘性とともに1層2層よりやや弱い
ローム土体の範囲
- 暗褐色 (10YR-3/2)
しまりあり・粘性あり
しまり・粘性とともに1層よりもやや強い
やや青色味が強い
 ϕ 1 ~ 3mmのローム粒少量



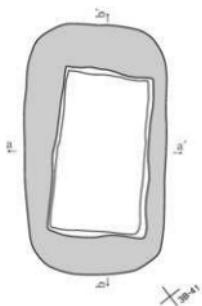
0 (1:50) 2.5m

第11図 SS-001(2)



第12図 SS-002(1)

埋葬施設

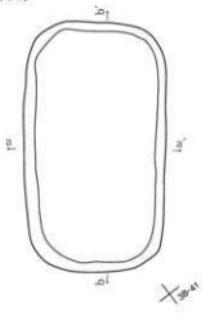


SS-002 埋葬施設

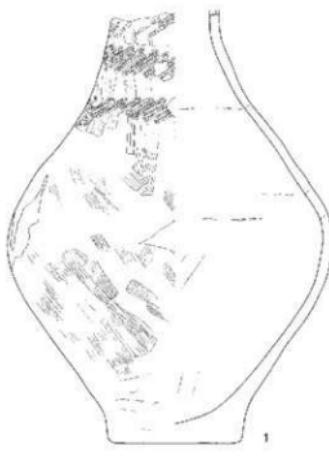
1. 黒褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性やや弱
 $\phi 1\text{ mm}$ のローム粒少量
 $\phi 1\text{ mm}$ の赤色粒少量
2. 黒褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性あり
 $\phi 2\text{ - }3\text{ mm}$ のローム粒中量
 $\phi 1\text{ cm}$ のローム粒少
くわづか
3. 黒褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性あり
 $\phi 1\text{ - }5\text{ mm}$ のローム粒少量
 $\phi 1\text{ - }2\text{ mm}$ の赤色粒わづか
4. 黒褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性あり
 $\phi 1\text{ mm}$ のローム粒少量
 $\phi 1\text{ cm}$ のローム粒少
くわづか
5. 黑褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性あり
 $\phi 1\text{ - }3\text{ mm}$ のローム粒中量
ローム土体の一部
6. 黒褐色 (10YR-2/2)
しまりあり・粘性あり
 $\phi 3\text{ cm}$ の赤点状にロームを含む



埋葬施設掘り方



0 (1:50) 2.5m



0 (1/3) 10cm

第13図 SS-002(2)

出土遺物 北東溝の底面付近から弥生土器の壺1個体が大小の破片に割れた状態で出土した。口縁部を欠損している。頸部から胴部へとハの字に広がり、胴部中位に最大径をもつ器形である。外面調整は、頸部から胴部上半にかけて縦方向、胴部上半以下は斜め方向のハケ、底部はヘラナデで、全体的に粗い器面調整である。内面調整はヘラナデである。頸部から胴部にかけて、3段のやや粗めの単節LRの横位の縄文帯が施されている。胴部最大径の位置に縄文帯とならないアクセント的な縄文が施文されている。胴部下半は広い範囲が濃い黒斑となっている。

SS-003 (第14図、図版7・18)

位置・規模 3A-08・09・19・3B-00・01・10グリッドで南東溝と南西溝の2つが検出されており、大半は調査区北側に位置している。主軸方向はN-41°-Eで、全体の規模は不明だが、調査部分から推定して他の検出された方形周溝墓に比べて周溝幅が広く、全体規模が大きいと推測される。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 周溝の規模は検出部分のみで、南東溝6.0m×1.4m、深さ0.30m～0.55m、南西溝6.3m×1.7m、深

さ0.24m～0.75mである。底面には凹凸があり、周溝は端でやや浅くなるものの、全体的に掘込みは深い。

周溝の壁は、U字状に掘り込まれており南西溝は端部が緩やかに高まる。また、2つの周溝の幅は類似し

た幅を呈するが、南東溝ではやや幅が狭くなる部分があるようだ。周溝両端の形状は半円形を呈している。

出土遺物 南西溝覆土中から宮ノ台式土器が出土し、4点を図示することができた。1は底部を欠損した

大型の壺である。図版7下段に1の出土状況を示したが、覆土上層から出土した大小の胴部破片が底面直

上から出土した頸部と接合した。口縁部は、くの字に屈曲し胴部がやや不自然な膨らみをみせている。実

測図ではわからないが、胴部上半の一部が凹んでおり、外面の施文がほぼ完了した段階で胴部が歪み始め

亀裂が生じたため、その部分に急速ヘラによるミガキを施して補修したと考えられる。歪みのあるまま乾

燥し焼成に至っている。頸部が縦方向、胴部は斜め方向のハケを施した後、胴部最大径の部分にヘラミ

ガキが施されている。無節Rの繩文が口唇部上端と口縁部に施されている。頸部下端に帯状の単節LRの

繩文が1条施され、胴部上半には単節LRの繩文による山形文が4段施されている。最下段の山形文には、

各頂点から下に向かって単節LRの繩文が施される。2～4は壺の胴部片である。1と同一個体である可

能性が高い。外面調整は2・3がハケ、4がハケの後ヘラミガキ、内面調整は全てヘラナデである。2は

単節LRの繩文帯が1段、3は単節LRの繩文による山形文が2段で2段目の山形文には、頂点から下に向

かって単節LRの繩文が施される。

SS-004 (第15図、図版8・9)

位置・規模 2B-92・3B-01～04・11～14・21～24グリッドに所在し、北東溝はSS-006南西溝と重複、南東溝はSS-009北西溝と重複しており、隣接する周溝の切り合い関係がある事例は、過去の調査でも限

定的である。規模は10.7m×9.9m、方台部の規模は9.0m×8.0mでやや長方形を呈している。主軸方向はN-

38°-Eである。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 各周溝の規模は検出面で、北東溝6.0m×0.8m、深さ0.10m～0.54m、南東溝6.2m×1.2m、深さ

0.07m～0.46m、南西溝4.6m×1.1m、深さ0.24m～0.34m、北西溝5.7m×1.0m、深さ0.30m～0.66mである。

北東溝はSS-006の南西溝と共有しているようにもみられるが、ややずれて溝幅が広がっていると推測さ

れる。土層断面において明確な切り合い関係を確認できていないが、本周溝の方が新しいようにはみられ

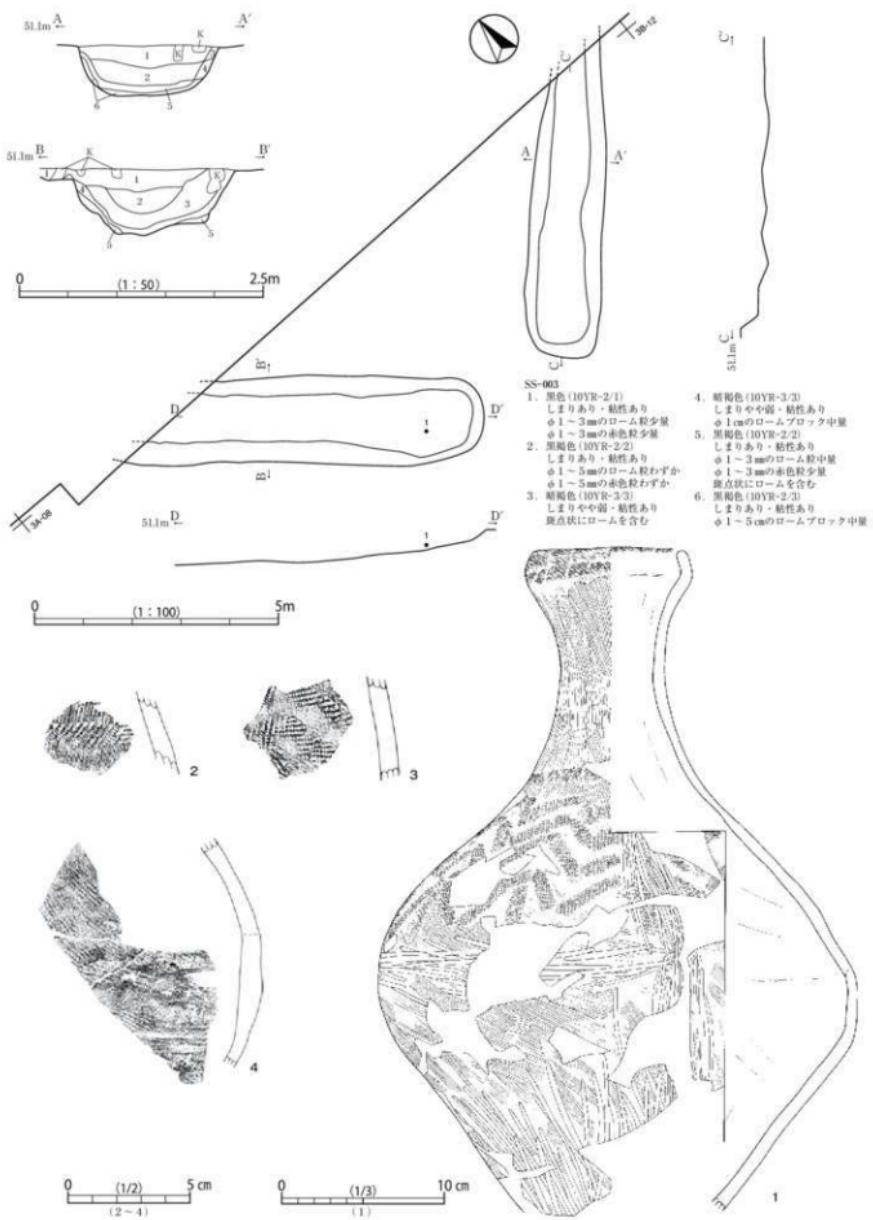
る。北東溝は溝幅があることから、南面の壁はSS-004のもので、北面の壁はSS-006のものであろうと推

測される。またSS-009とはややずれて南東溝が重複しており、土層断面から本周溝の方が新しいようにはみられるが、明確な壁の立ち上がりを確認するには至っていない。各周溝底面には凹凸が目立つ。北西

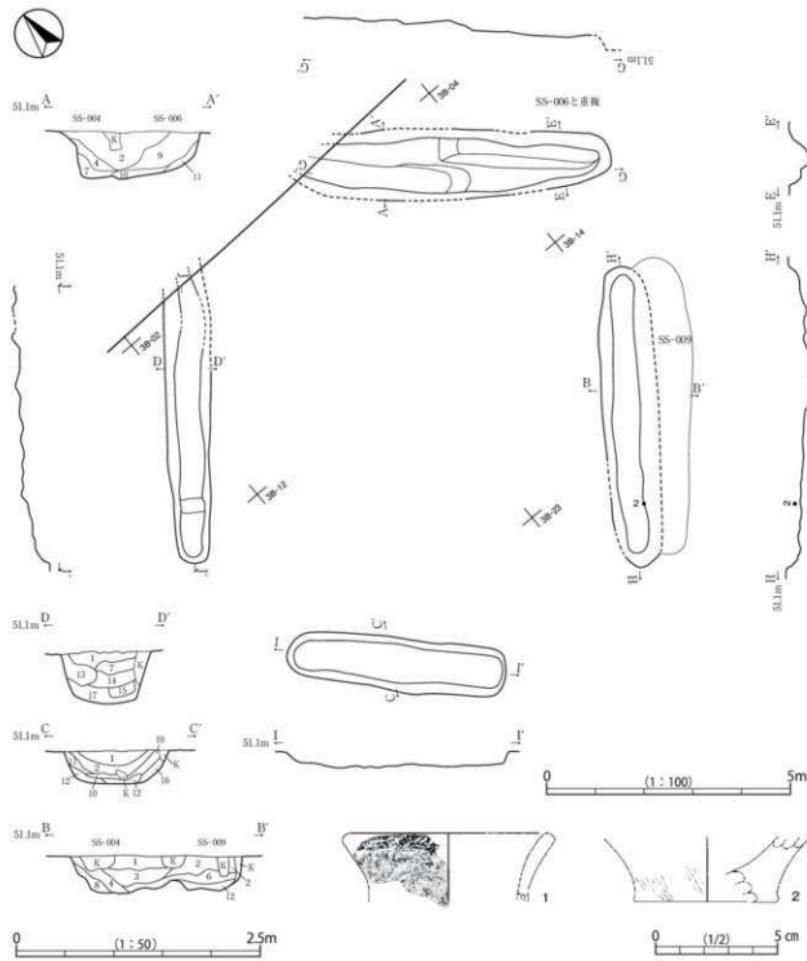
溝では、南端が一段高くなっている。各周溝の壁は、ほぼ直に掘り込まれている。また、周溝の長さは統

一性がなく、幅はそれぞれでは一定の幅を呈するが、統一性のある共通した幅を呈しているわけではない

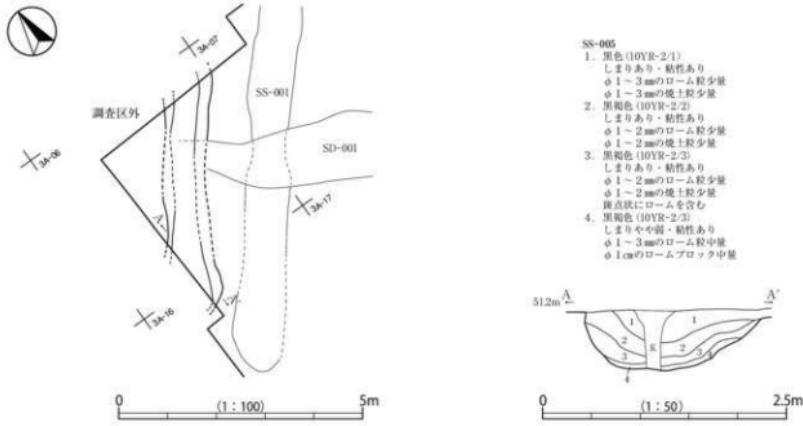
ようである。各周溝両端の形状も一定していない。



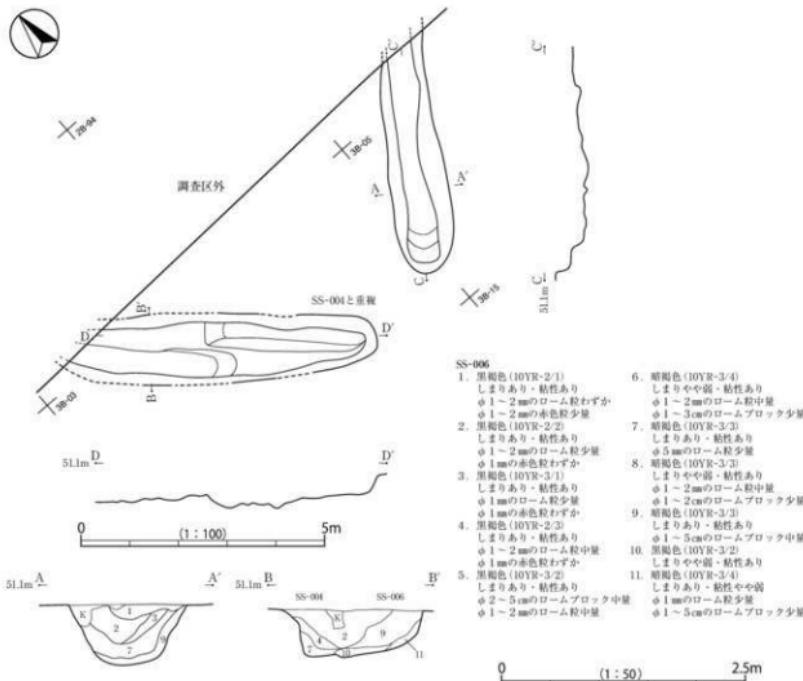
第14図 SS-003



第15図 SS-004



第16図 SS-005



第17図 SS-006

出土遺物 南東溝の覆土中から宮ノ台式の土器片が出土し、2点を図示することができた。1は壺の口縁部である。内外面には、幅の広いハケの痕跡が若干認められる。口唇部には単節LRの繩文が施される。2は底部片で、外面調整はハケのちヘラナデ、内面調整はナデである。

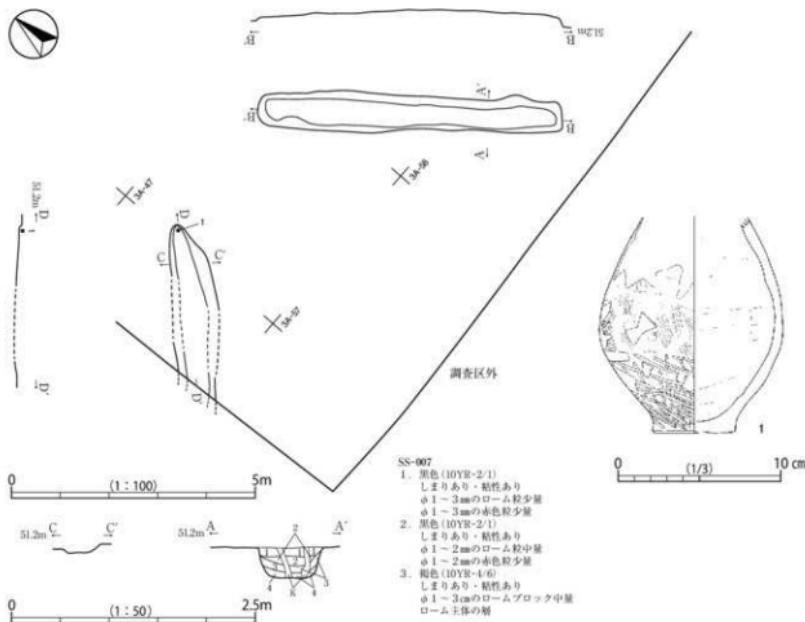
SS-005 (第16図、図版9)

位置・規模 3A-06・16グリッドで、南東溝の一部を検出し、残りの部分およびその他の周溝は調査区外へ続いている。この周溝は、調査会によるNo33の方形周溝墓の一部と考えられる。No33では2条の周溝と埋葬施設1基が検出されている。No33の周溝から主軸方向はN-49°-Eである。No33の周溝規模から、本遺構の規模は主軸方位で約13m、方台部の規模は主軸方位で10.5mあり、やや長方形を呈するようである。

埋葬施設 本調査区内では埋葬施設は確認されなかったが、調査会によるNo33において長方形の埋葬施設が方台部の中央で検出されている。

周溝 周溝の規模は検出部分のみで、4.2m×0.9m、深さ0.21m～0.40mである。断面はU字状を呈し、溝幅は搅乱の影響もあり不安定である。

出土遺物 本調査区内では遺物は出土しなかったが、No33ではハケ調整の壺が1点出土していることから、本周溝墓が宮ノ台式期であると判断される。



第18図 SS-007

SS-006 (第17図、図版8・10)

位置・規模 2B-93～95・3B-03～05グリッドで南東溝と南西溝のみが検出されており、北東溝と北西溝は調査区外に位置している。主軸方向はN-40°-Eである。南西溝はSS-004の北東溝と共有しているようにもみられるが、ややずれて溝幅が広がっていると推測される。土層断面において明確な切り合い関係を確認できていないが、本周溝の方が古いようにみられる。南西溝は溝幅があることから、南面の壁はSS-004のもので、北面の壁はSS-006のものであろうと推測される。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 各周溝の規模は検出部分で、南東溝4.6m×1.2m、深さ0.34m～0.54m、南西溝5.7m×1.5m、深さ0.24m～0.62mである。南東溝は、南西端が一段高くなっている。南西溝はSS-004北東溝と重複しているためか、底面には凹凸が目立つ。SS-004北東溝の掘り直しの影響よりも南西溝の築造の段階ですでに凹凸があったと考えるべきだろう。

出土遺物 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

SS-007 (第18図、図版11・18)

位置・規模 3A-46～48・58グリッドで、北東溝と北西溝の2つの周溝が検出されており、南東溝と南西溝は調査区外に位置している。主軸方向はN-41°-Eである。図示していないが、北西溝に隣接して、調査会による№31方形周溝墓の周溝が位置している。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 規模は検出部分で、北東溝6.2m×0.8m、深さ0.13m～0.34m、北西溝3.4m×0.8m、深さ0.03m～0.29mである。底面には凹凸があり、北東溝は断面U字状を呈する一方、北西溝は浅く北端では次第に浅くなり尖った形態を呈している。2つの周溝の幅はいずれも狭く、周溝両端の形状は一定していない。小型の壺が、この先端部の底面から出土している。この壺を取り上げると底面のロームに被熱によるらしい赤色の変質が見られた。

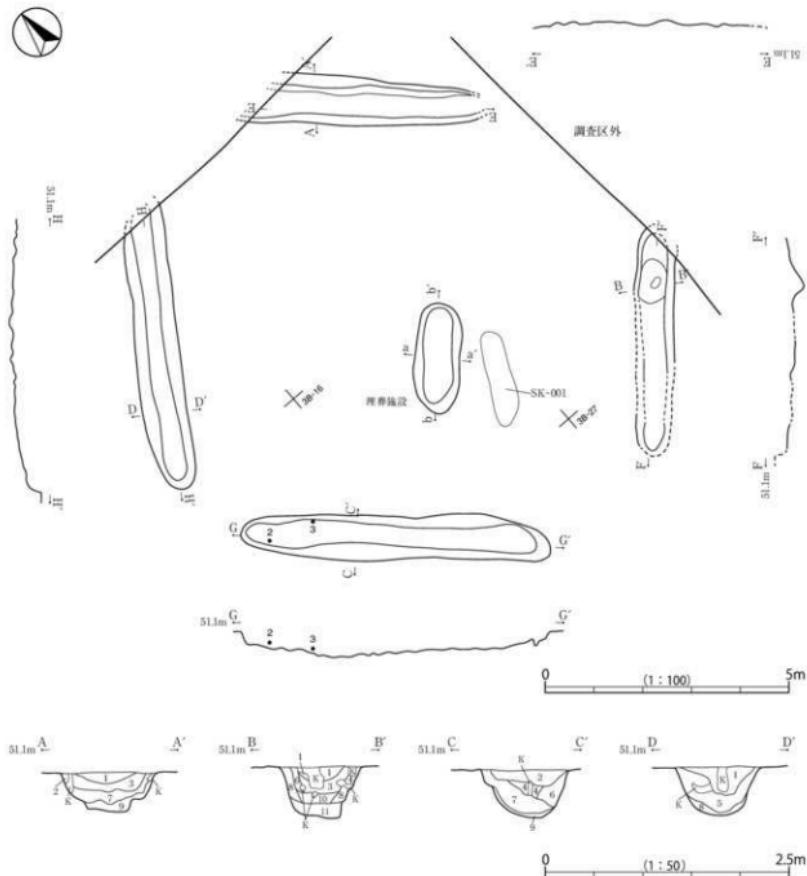
出土遺物 宮ノ台式の小型の壺が出土している。土圧によるものとみられるヒビが入っていたものの、形状を保って出土した。頸部から上を欠損している。最大径は胴部やや下にある下彫れの器形である。外面調整はハケ、底部近くにわずかなヘラミガキ、内面調整はヘラナデである。胴部中段に刃と考えられる圧痕が1か所確認された。図版18に圧痕の接写と刃のレプリカを掲載した。

SS-008 (第19・20図、図版12～14)

位置・規模 2B-95～97・3B-04～07・15～17・25～27グリッドに所在する。周溝墓全体の規模は9.9m×11.0m、方台部の規模は8.0m×9.4mで、やや長方形を呈する。主軸方向はN-39°-Eである。

埋葬施設 方台部の中央やや南寄りで埋葬施設とみられる土坑を1基検出した。平面形は楕円形で、規模は2.3m×0.9m、深さ0.09m～0.13mである。土層観察では、棺の痕跡は確認できなかった。

周溝 4つの周溝のうち全体規模が確認できるのは、南西溝のみである。各周溝の規模は検出部分で、北東溝4.3m×1.0m、深さ0.30m～0.44m、南東溝4.3m×0.8m、深さ0.16m～0.44m、南西溝6.4m×0.9m、深さ0.17m～0.50m、北西溝5.6m×0.9m、深さ0.27m～0.55mである。南東溝の北東端寄りの底面に、土坑状に浅い落ち込みが認められた。周溝構築後の土坑ではないようである。周溝の断面形はU字状を呈し、底面は凹凸がみられた。周溝の長さは、南東がやや短いようである。溝幅はそれぞれ異なり、一定していない。



SS-008

1. 黒褐色 (10YR-2/1)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 2mmのローム粒少量

φ 1mmの赤色粒少量

2. 黒褐色 (10YR-2/2)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 3mmのローム粒少量

φ 1cmのロームブロックごくわずか

φ 1 ~ 2mmの赤色粒少量

3. 黒褐色 (10YR-2/2)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 3mmのローム粒少量

φ 1 ~ 2mmの赤色粒少量

4. 褐色 (10YR-2/1)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 2mmのローム粒少量

φ 1mmの赤色粒少量

5. 黒褐色 (10YR-3/2)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 5mmのローム粒少量

φ 1 ~ 2mmの赤色粒わずか

6. 黒褐色 (10YR-2/2)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 3mmのローム粒少量

φ 1 ~ 3mmの赤色粒少量

7. 黑褐色 (10YR-2/3)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 5mmのローム粒少量

φ 1 ~ 3mmの赤色粒少量

8. 褐褐色 (10YR-3/4)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 5mmのローム粒少量

9. 褐褐色 (10YR-3/3)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 5mmのローム粒多量

φ 2 ~ 5cmのロームブロック中量

ローム土体の崩

10. 褐褐色 (10YR-3/3)

しまりあり・粘性あり

φ 1 ~ 5mmのローム粒わずか

φ 1 ~ 5cmのロームブロック少量

φ 1 ~ 3mmの赤色粒わずか

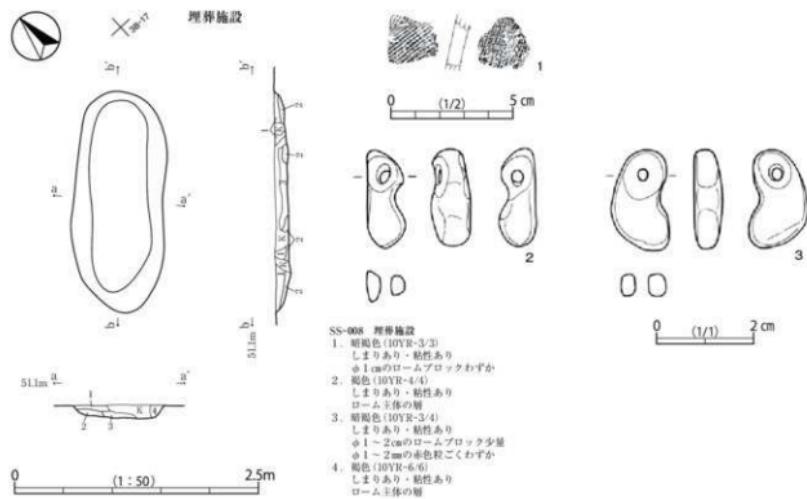
11. 開色 (10YR-4/6)

しまりあり・粘性あり

φ 3 ~ 5cmのロームブロック多量

ロームブロック土体の崩

第19図 SS-008(1)



第20図 SS-008(2)

出土遺物 北西溝覆土中から弥生土器甕の破片1点、南西溝の底面近くから石製勾玉2点が出土している。1は甕胴部片である。内外面ともに調整はハケである。2・3は緑色を呈する滑石製の小型の勾玉である。ともに全面がよく研磨されている。2の背面は扁平で尾部に厚みがあり、素材を生かした形状であろう。3は丸みがあり2に比べて厚みがない。2点とも穿孔は両側からの回転穿孔と考えられる。

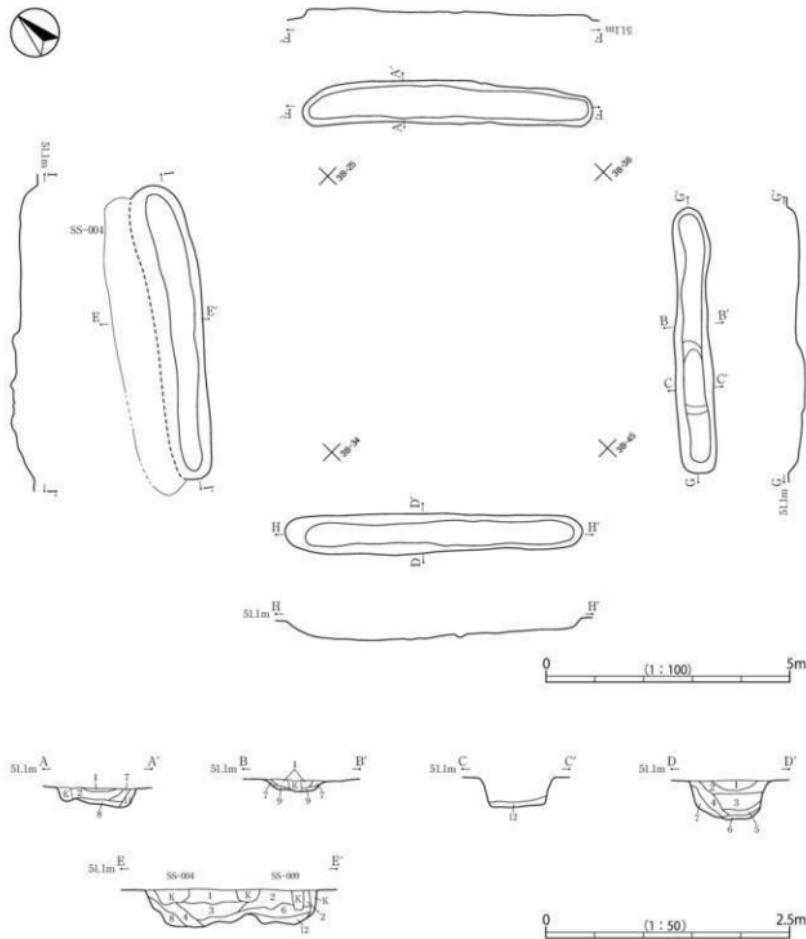
SS-009 (第21図、図版8・14・15)

位置・規模 3B-13～15・23～26・33～36・44・45グリッドに所在し、北西溝がSS-004南東溝と重複している。周溝墓全体の規模は12.6m×9.6m、方台部の規模は9.7m×8.0mで明らかな長方形を呈している。主軸方向はN-47°-Eである。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 各周溝の規模は、北東溝5.9m×0.9m、深さ0.12m～0.24m、南東溝5.4m×0.8m、深さ0.08m～0.40m、南西溝6.1m×0.9m、深さ0.18m～0.41m、北西溝6.0m×1.0m、深さ0.12m～0.46mである。南東溝底面に、浅い土坑状の落ち込みがある。SS-004の南東溝とややすれて北西溝が重複しており、西壁は失われている。土層断面から本周溝の方が古いようにはみられるが、明確な切り合い関係を確認するには至っていない。溝の断面はU字状を呈し、底面には凹凸がある。

出土遺物 弥生土器の壺胴と考えられる小片などが出土したが、図示できるものはなかった。



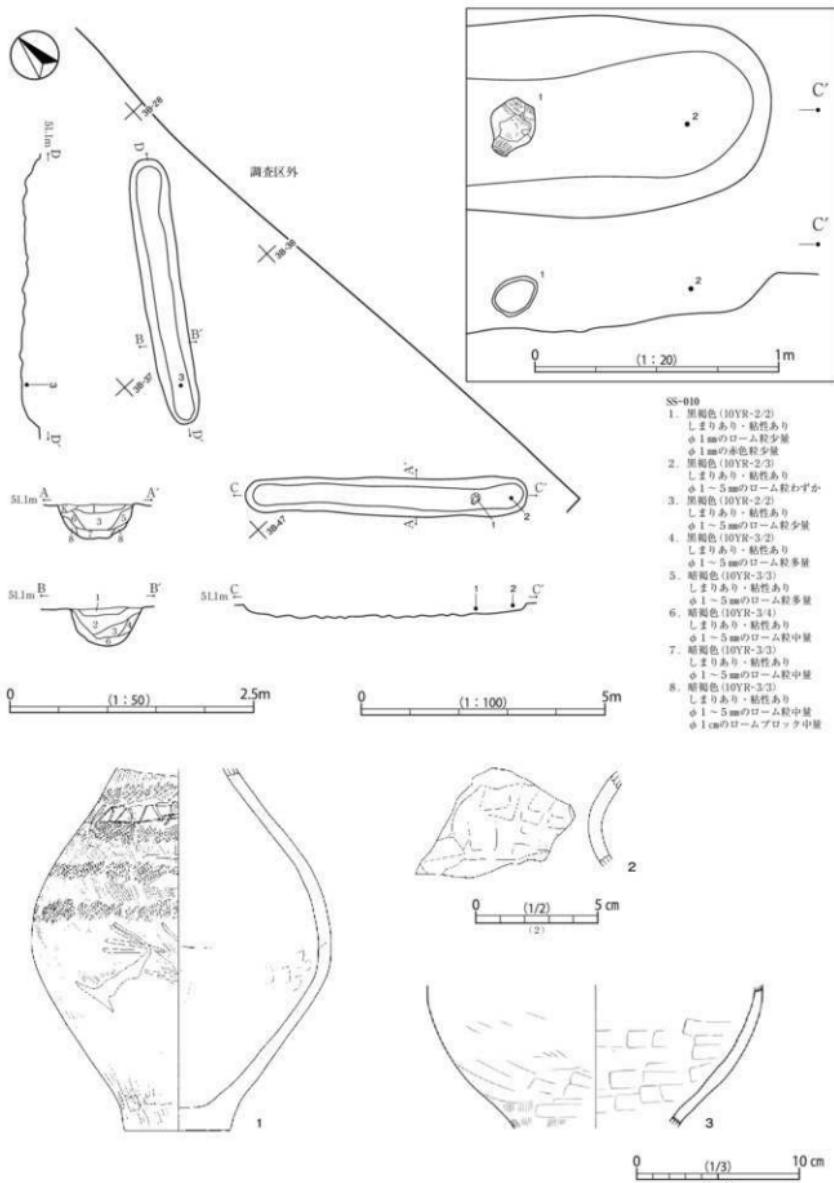
- SS-009**
1. 黒褐色 (10YR 2-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒少量
 2. 黒褐色 (10YR 3-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒少量
 3. 黒褐色 (10YR 3-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒少量

4. 黒褐色 (10YR 2-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒ごくわずか
5. 黑褐色 (10YR 2-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒少量
6. 黑褐色 (10YR 2-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 5 mm のローム粒少量

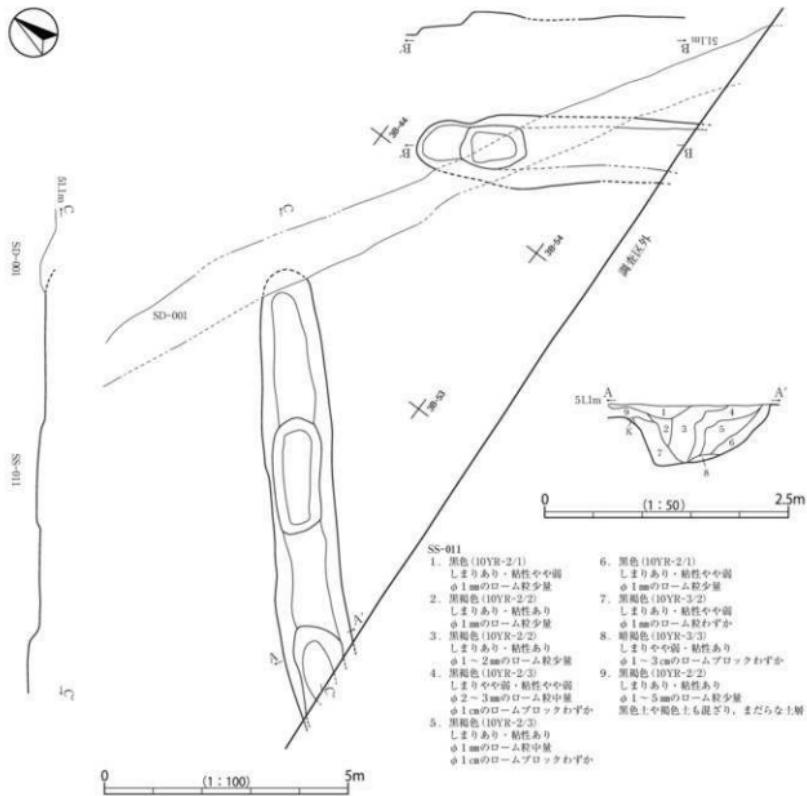
7. 黑褐色 (10YR 3-2)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒中量
φ 1 mm の赤色粒ごくわずか
8. 黑褐色 (10YR 3-4)
しまりやや弱・粘性あり
ローム
9. 黑褐色 (10YR 3-4)
しまりあり・粘性あり
ローム主他の割合
10. 黑褐色 (10YR 3-4)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 2 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒ごくわずか

11. 棕色 (10YR 4-6)
しまりあり・粘性あり
ローム主他の割合
12. 黑褐色 (10YR 3-4)
しまりあり・粘性あり
φ 1 ~ 3 mm のローム粒中量
φ 1 ~ 2 mm のローム粒少量
φ 1 mm の赤色粒ごくわずか

第21図 SS-009



第22図 SS-010



第23図 SS-011

SS-010 (第22図、図版16～18)

位置・規模 3B-27・37・47・48グリッドで南西溝と北西溝のみが検出された。主軸方向はN-44°-Eである。本遺構の北東溝と南東溝は、調査区外に位置している。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 規模は、南西溝 $5.8\text{m} \times 0.8\text{m}$ 、深さ $0.13\text{m} \sim 0.34\text{m}$ 、北西溝 $5.5\text{m} \times 0.8\text{m}$ 、深さ $0.11\text{m} \sim 0.40\text{m}$ である。溝の底面は、やや凹凸がある。

出土遺物 弥生土器が南西溝および北西溝の覆土中から出土している。1の壺は頸部から上がり、輪積みの境で欠損している。器面調整は、頸部で縱方向、胴部で斜方向、底部付近では縱方向のハケを施す。胴部は部分的なヘラミガキである。内面はヘラナデである。頸部から脛部にかけて単簡LRの繩文が4段施され

ている。1段目と2段目の間には横走する沈線を施し、その間に波状文が部分的に施されている。2は壺の頸部で外面はナデ、内面はハケである。3は壺の胴部で、外面は丁寧なナデ調整、内面はナデ調整である。

S S - 0 1 1 (第23図、図版17)

位置・規模 3B-41 ~ 44・51 ~ 55グリッドに所在し、溝SD-001に一部が壊されている。北東溝と北西溝が検出されており、その他の周溝は調査区外に位置している。主軸方向はN-51°-Eである。

埋葬施設 検出されなかった。

周溝 各周溝の規模は検出部分で、北東溝5.5m × 1.5m、深さ0.15m ~ 0.50m、北西溝8.5m × 1.4m、深さ0.24m ~ 0.70mである。それぞれの底面に土坑状に深いところがあり、全体に底面には凹凸がある。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

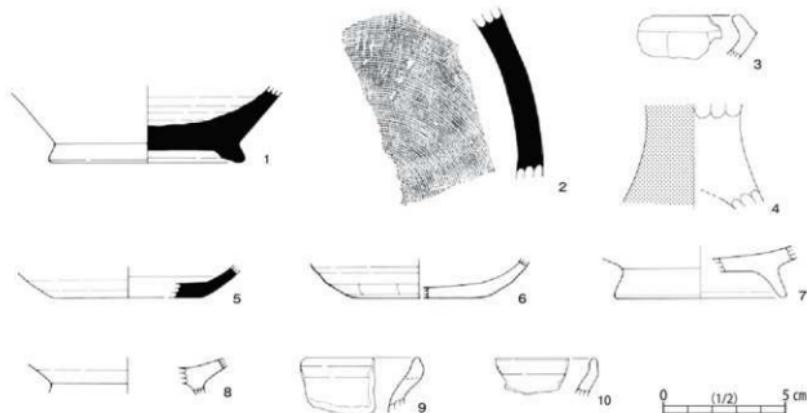
第3節 その他の遺構と遺物

調査区の北西角から南東方向へと延びる溝状遺構1条が検出されている。遺構外の遺物は、いずれも小破片が多く、図示できるものは僅かである。弥生土器のほか古墳時代以降の遺物が含まれているが、いずれも小片である。周辺の遺構の状況を反映したものと考えられる。

I 溝状遺構

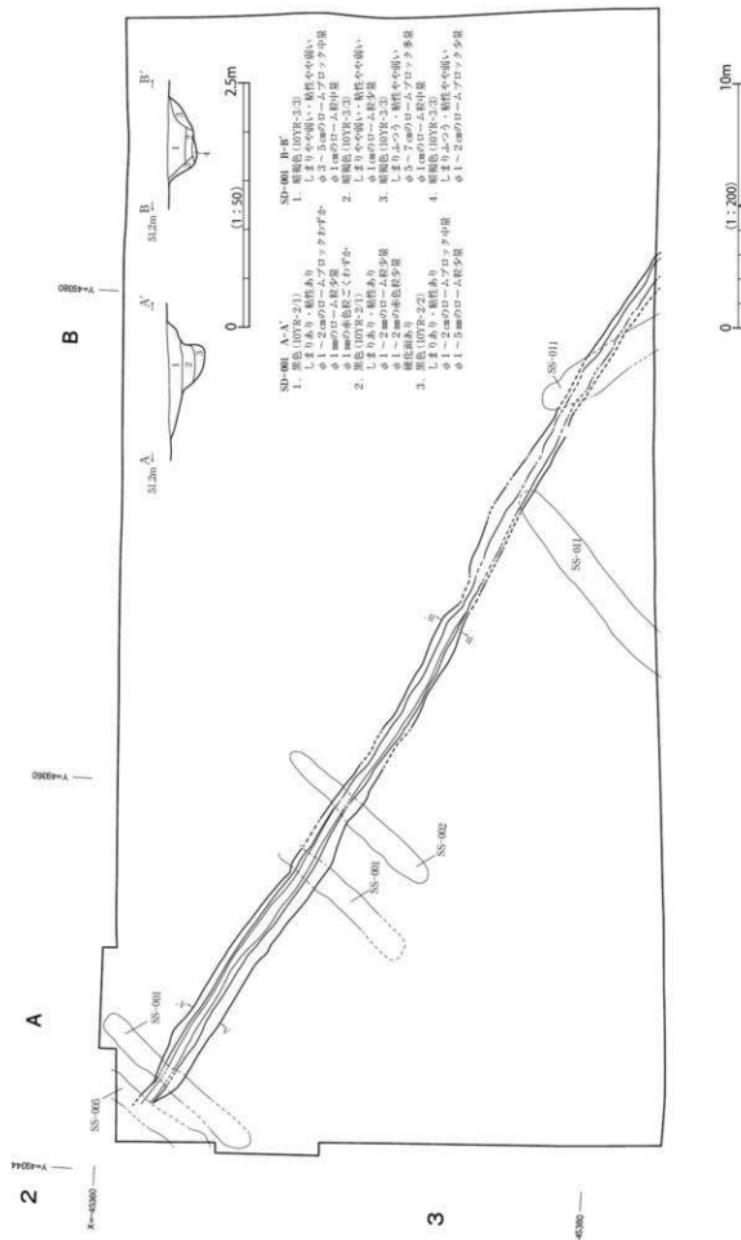
S D - 0 0 1 (第24図・第25図、図版17・18)

北西から南東に延びる溝で、走行方向は、N-60°-Eである。総延長は39.5mで、幅は0.6m ~ 1.4m、確認面からの深さ0.13m ~ 0.44mである。法面中段に若干の段が現れている部分がある。この溝は、調査会による昭和52年～昭和54年の調査においても、今回の調査区の北西側で検出されており、方形周溝墓群を壊しながら台地上を縦断している。遺物は覆土中から小破片となった土器片が出土しており、古墳時代後期や奈良・平安時代などの須恵器、土師器などからなっている。本遺構の時期については、中・近世と判断したいが、覆土の状態や小破片だが奈良・平安時代の高台付窯などが目立って含まれていることから、



第24図 SD-001(1)

第25回 SD-001(2)

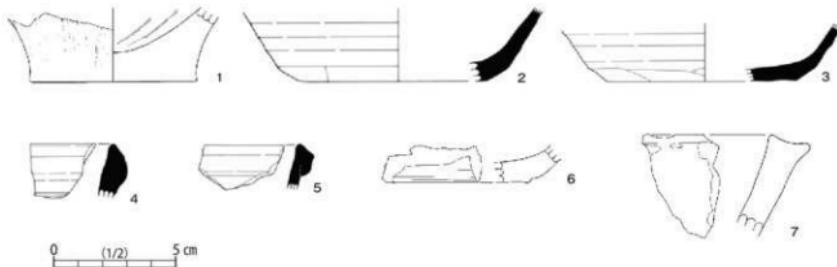


あるいは古代に遡る可能性もあるかもしれない。ただ、覆土に硬化面などは確認されていないことから道路であった可能性は低く、区画を目的とした溝である可能性が高い。昭和52年～昭和54年の調査区で検出された溝の中に同一方向のものが他の地点に数条あり、同一時期に構築されたものと推測される。

1は須恵器の底部破片である。高台と内面に自然釉が認められる。短頸壺の底部であろう。2は古墳時代後期の提瓶の胴部破片である。カキメが明瞭に認められる。千葉県内では提瓶の出土例は少ない。3は古墳時代後期の杯口縁部である。4は高坏の脚部である。外面には赤彩が認められる。5～10は、奈良・平安時代の杯・甕類である。5はロクロ整形の須恵器杯である。内面はナデ、底部は回転ヘラ切りである。2は土師器杯、3・4は土師器高台付杯である。5・6は土師器甕の口縁部で、ともに内外面の調整はナデである。9は口縁部が外に広がり、口唇部がわずかにつまみ上げられる。10は口縁部が屈曲し、ほぼ垂直につまみ上げられる。

2 遺構外出土の遺物（第26図、図版18）

1は宮ノ台式の壺の底部である。外面にハケメを伴う。2～5は須恵器である。2・3はロクロ整形の杯で、体部下端部には手持ちヘラケズリが施されている。底部はヘラケズリである。4・5は甕の口縁部である。4は厚みのある口縁部で、5は折り返し口縁となっている。6は釉薬のかかる椀ないしは皿の底片である。7は擂鉢の口縁部である。



第26図 遺構外出土の遺物

第3章 総括

第1章第2節で触れたように、道庭遺跡は過去に数度の調査が実施されている。今回の調査範囲は、過去の調査で明らかとなっていた弥生時代中期の集落に伴う墓域にあたる範囲で、予想された通り全域で方形周溝墓群が検出された。弥生時代以外の時期の遺構としては、縄文時代の陥穴1基が検出されただけで、それ以外は、古墳時代・奈良・平安時代・中世の土器片のわずかに出土があった程度である。ここでは、検出された弥生時代の方形周溝墓群についてふれ、これまでの調査成果も加え総括としたい。

弥生時代の集落と墓域（第27図）

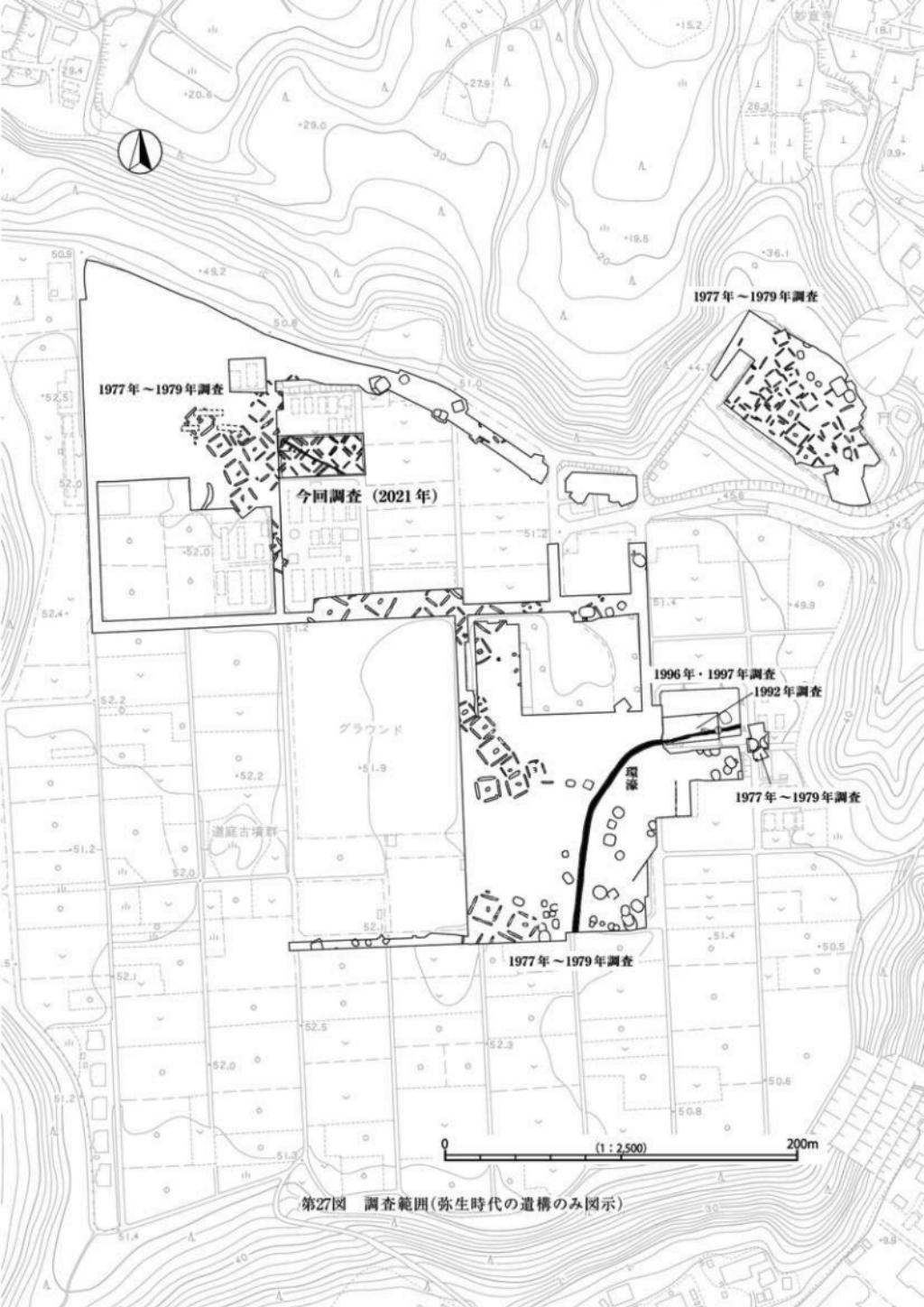
道庭遺跡の弥生時代集落と墓域については、以下のような調査成果である。

中期の遺構は、中期後葉の宮ノ台式期の竪穴住居跡15軒（一部は後期の可能性あり）、方形周溝墓84基、土器棺墓11基、土坑5基、環濠1条などである（城田 1998・小高 2002）。限られた範囲の調査ではあるが、中期の竪穴住居跡群はいずれも環濠内に位置し、竪穴のプランは円形ないし楕円形で、4本の柱穴と梯子穴、周溝が明瞭である。方形周溝墓は全て四隅を掘り残したタイプで、隣接する周溝の重複例がほほないという特徴がある。今回の調査では、2か所で重複が確認されており異例である。溝の外縁部間の規模で示すと、最小の7m四方から最大20m四方まであるが、概ね8m～16mの規模である。埋葬施設は、万台部の中央土坑と周溝内、四隅の陸橋部における土器棺墓の3つからなっている。方形周溝墓の時期は、ほぼ中期に限定されるとみられる。後期になると一般的な四隅の陸橋がなく溝が全周するタイプあるいは一か所だけ切れるタイプの方形周溝墓は検出されていない。環濠は一周するという前提であれば、北西部において全体の約4分の1が検出されたことになるが、台地縁辺部には環濠を掘らなかった市原市草刈遺跡のような可能性もあるかもしれない。環濠の幅は約3m、深さ約2m、V字状の断面形を呈する。土壠は確認できおらず、時期については、宮ノ台式期に掘削され、次第に自然堆積により埋まりつつ、後には捨て場としても使われ、後期初頭にはかなり埋没した状態になっていたと推測されている（小高 2002）。環濠の埋没後に後期の竪穴住居が構築されており、後期後半には環濠の存在はほほなくなっていたと推測される。

後期になると方形周溝墓は姿を消し、竪穴住居が主体となり、約50軒が検出されている（城田 1998・小高 2002）。竪穴のプランは隅丸長方形ないしは隅丸方形で、約3m四方の小規模な竪穴のほか、一辺約10mの大型の竪穴も存在する。中期に構築された方形周溝墓群はなくなり、明確な墓域を形成しなくなる。集落は後期後葉まで継続するようだが、集落規模の推移については明らかでない。

今回の調査で検出された方形周溝墓は11基であるが、その内の1基はこれまでの調査で検出された方形周溝墓に帰属すると考えられることから、合計で83基の方形周溝墓が検出されることになる。小高春雄は、昭和52～54年調査の報告で、周溝墓群を7つのグループに分けているが、後に環濠西側のⅠ群、北西部のⅡ群、一段下った北東部のⅢ群の3つに大別している（小高 1983・2002）。

今回の調査範囲は台地の北西側に位置し、検出された遺構群は、方形周溝墓が密に分布する小高のいうⅡ群の区域にあたっている。主軸方向は、N-38°～51°-Eの範囲にあり、周辺の周溝墓と同様の方位を示している。方形周溝墓のプランについては、これまでの検出例が全て四隅に橋を残した、縱が横より若干



長い略正方形～長方形という形態がほとんどで、今回の調査でも概ね共通する。4辺の周溝全てが検出されたSS-001・002・004・008・009から周溝墓の規模をみると概ね10m～13mの範囲で、特別大型のものが含まれているわけではない。過去の調査で周溝が重複する事例では、調査会No7とNo8の周溝墓で確認されている程度で、道庭遺跡では周溝の重複事例は極めて限られている。今回の調査では、SS-004の2辺の周溝がSS-006・SS-009と重複していることが確認されている。本文で記したように、SS-004が他の2基の周溝墓より新しい可能性はあるものの、近接する方形周溝墓どうしは、既に掘られていた周溝の辺を認識した上で新たな周溝が掘られると思われることから、先行する周溝は埋没しきっていないか、あるいは維持されている可能性が高い。ある程度の埋没期間を伴っていない覆土において切り合い関係が明瞭に残される可能性は低いのではないかと考えられる。これまでの調査成果からは、築造開始以後どのように方形周溝墓が展開していったのかは明らかではない。SS-004とSS-006・SS-009との新旧関係は捉えきれていないが、3基のうちSS-004が最も新しいとすれば、方形周溝墓群の築造が南から北へと概ね展開していったといえるのかもしれない。

埋葬施設のプランについては、これまでの調査例では隅丸長方形を呈するものが多く検出され、椭円に近いものも数例検出されている。今回の調査で埋葬施設が検出されたのはSS-001・002・008の3基で、両者が検出されており、隅丸長方形の埋葬施設の中に木棺直葬とみられる長方形の主体部が検出されている。SS-001では2基の形態の異なる埋葬施設が検出されている。SS-001第1埋葬施設の主体部では縦1.4m、横0.7m、SS-002の埋葬施設の主体部では縦1.7m、横0.9mの規模であることから、ぎりぎり遺体を伸展葬できる規模と考えられる。検出状況から、追葬の可能性はなく埋葬は1体を納めたものと考えられる。検出された埋葬施設の掘り込みは浅く、埋葬施設に覆土されていたことを考えれば、ある程度の高さを伴う墳丘が存在していたことは言うまでもない。

過去の調査で検出された73基の方形周溝墓のうち、遺物を伴うのは14基である。出土遺物は、土器がほとんどであるが、周溝底から刀子、周溝覆土上層より石器3点（抉入片刃石斧2点、扁平のみ形石斧1点）が出土した例が1例ずつである。土器の出土例がある周溝墓は13例あり、壺のみが5例、甕のみが2例、壺と甕の合わせ口が3例、壺と壺の合わせ口が1例、壺と甕の細片が複数出土した例が1例、鉢のみが1例である。壺と甕の合わせ口では、全て甕を蓋として利用していた。周溝内からが11例で、底面からの出土が大半である。周溝の端や中央寄りからのものがほぼ半々である。周溝以外の出土例としては、主体部覆土中や周溝墓の陸橋部分に検出された土坑からの例、また、周溝の外側に検出された土坑からの出土例などがわずかだがある。今回の調査では、検出された11基の周溝墓のうち、8基の周溝内から土器が出土している。小破片となって周溝覆土から出土したものが4例、完形に近い出土例が4例で、全て壺であった。SS-003の周溝から出土した壺は歪みのある器形で、施文中に脣部の一部が歪み、亀裂が発生しかけたためにミガキを部分的に施して、何とか焼成に至ったようである。生活道具としての使用に耐えそうにないことから、葬送用にだけ使用されたものと思われるが、あるいは葬送用の土器として始めから製作されたものなのかもしれない。

今回の調査における周溝墓群の時期については、文様構成を知り得る出土土器が壺4点に限られるが、単純な縄文帯が数段施文されるものと縄文による山型文からなるものであることから、宮ノ台式中葉から後葉と考えられる。このことから、今回の調査区の方形周溝墓群は中期後葉の宮ノ台式の後半期の周溝墓群であろうと考えられる。

第1章第2節でも記したが、道庭遺跡は、九十九里浜平野を望む環濠集落遺跡としては、周辺の発掘調査事例が増えた現在においても、稀有な存在である。道庭遺跡に集落が現れる弥生時代中期には、九十九里浜平野の第Ⅱ砂堤群の姿が認められる環境となっていた。この時期の道庭遺跡の直下には、低地が広がり第Ⅰ砂堤群がわずかに点在し、弥生の小海退期の段階でも海の影響を受けやすい低地の環境が続いていたと推測される。灌漑施設を伴うような水田の開発が行われた可能性は、九十九里浜平野部においては低いと考えられる。宮ノ台式期の集団が水稻耕作を行える低地を見つけるとすれば、台地北東部の丘陵地内に広がる作田川の広い谷底平野ないしは、真亀川の支流のわずかな谷底平野に限られていたと推測される。宮ノ台式期の環濠集落が営まれたのも、たまたまこの地に谷底平野に出現した低地の好条件が重なったからなのである。森脇 広によれば、第Ⅱと第Ⅲ砂堤群の境界が約2200年前～2500年前にあたり、弥生時代終末には第Ⅱ砂堤群がほぼ形成しあわっていることから（森脇 1979）、第Ⅱ砂堤群上にも広く畑作などに適した土地が現れている可能性もある。しかし、現在においてもこの地域に弥生時代中期の環濠集落が道庭遺跡に限られていることを考えれば、当時の九十九里浜平野の土地利用は依然として難しかった可能性が高い。古墳時代以降になると九十九里浜平野を望む台地上に遺跡数が増加し、多くの古墳が築造されるようになる。このことは、九十九里浜平野の砂堤群の土地利用や砂堤以外の低地の開発が、古墳時代以降ようやく活発に行われるようになることを反映しているのであろう。

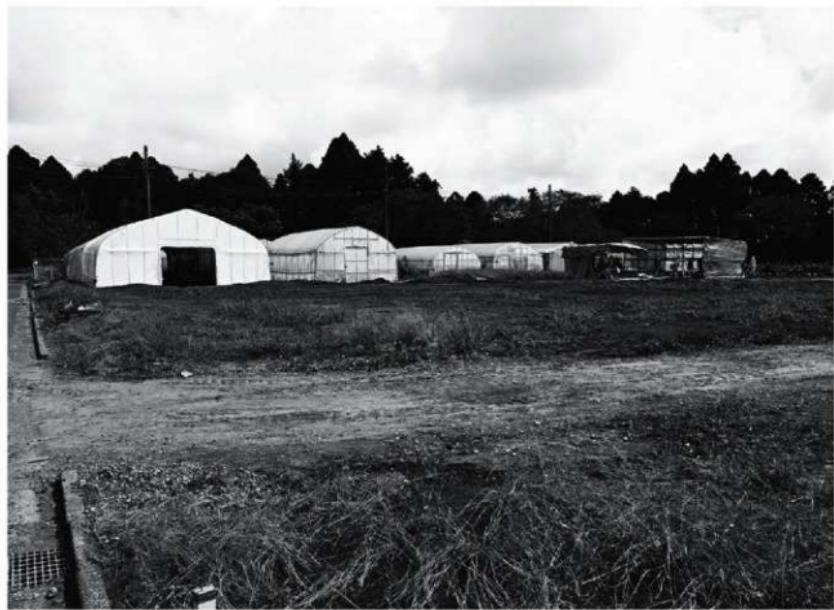
参考文献

- 小高春雄ほか1983「道庭遺跡」道庭遺跡調査会
小高春雄 2002「道庭遺跡」「千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）」千葉県
財千葉県文化財センター 1993「東金市道庭遺跡－農業大学校バイテク棟建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－」千葉県文化
財センター調査報告第248集
財千葉県文化財センター 1998「東金市道庭遺跡－農業大学校バイテク棟埋蔵文化財調査報告書2－」千葉県文化財セン
ター調査報告第332集
森脇 広 1979「九十九里浜平野の地形発達史」「第四紀研究」18

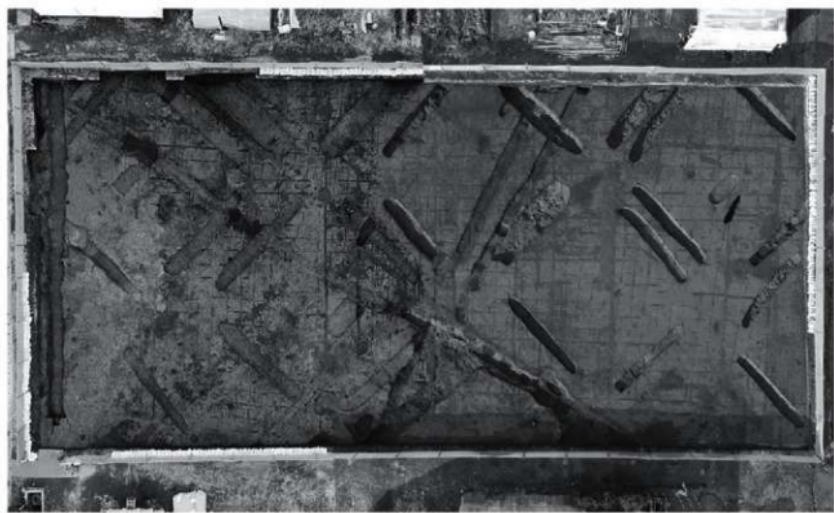
写 真 図 版



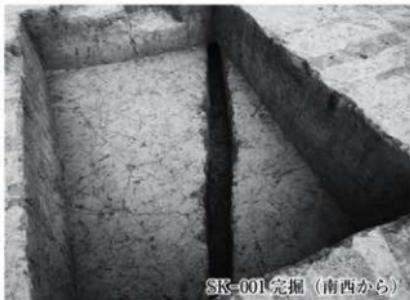
航空写真 (S=1/10,000)



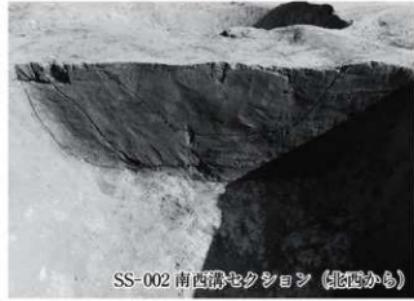
調査前風景（南から）

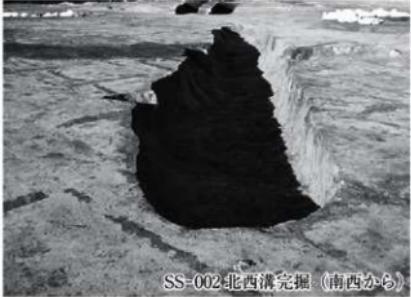
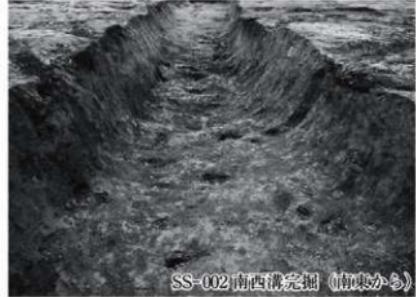


方形周溝墓 完掘全景（スイッチバックによる調査のため2時期の写真をデジタル合成）











SS-003 完掘（南から）



SS-003 南東溝セクション（南西から）



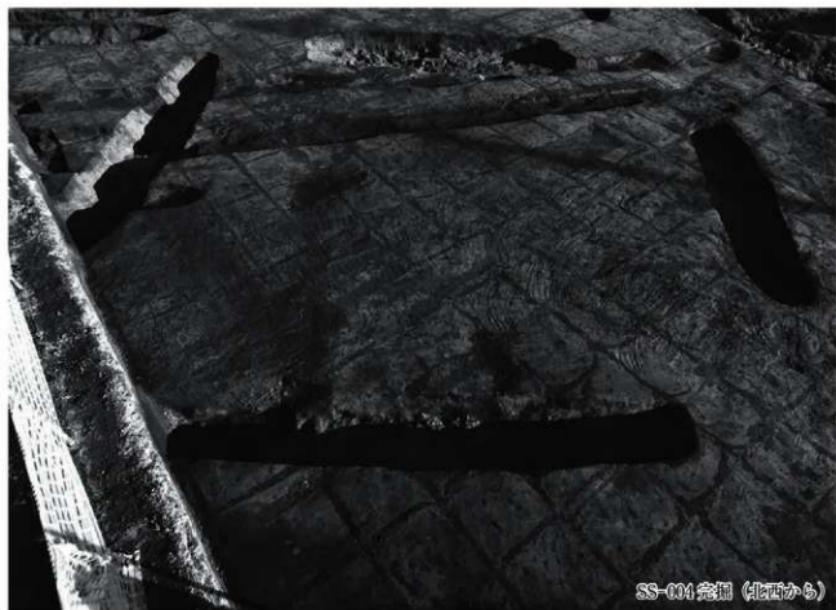
SS-003 南西溝セクション（南東から）



SS-003 南西溝遺物出土状況（南西から）



SS-003 南西溝遺物出土状況（南西から）





SS-004 南西溝セクション (北西から)



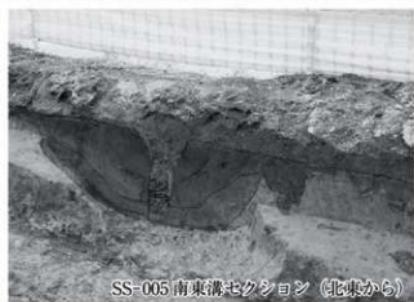
SS-004 北西溝セクション (南西から)



SS-004 南西溝完掘 (北西から)



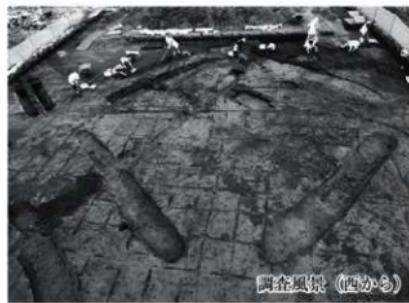
SS-004 北西溝完掘 (北東から)



SS-005 南東溝セクション (北東から)



SS-005 完掘 (北東から)









SS-008 埋葬施設セクション (北東から)



SS-008 埋葬施設セクション (南西から)



SS-008 主体部完掘 (南西から)



SS-008 南西溝遺物出土状況 (北西から)



SS-008 北東溝完掘 (南西から)



SS-008 南東溝完掘 (南西から)



SS-008 南西溝完掘 (北西から)



SS-008 北西溝完掘 (北東から)



SS-009 完掘 (南西から)





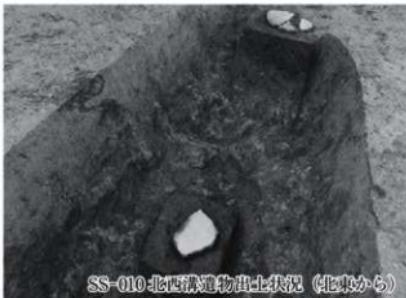
SS-010 南西溝セクション (北西から)



SS-010 北西溝セクション (北東から)



SS-010 南西溝遺物出土状況 (南から)



SS-010 北西溝遺物出土状況 (北東から)



SS-010 北西溝完掘（南西から）



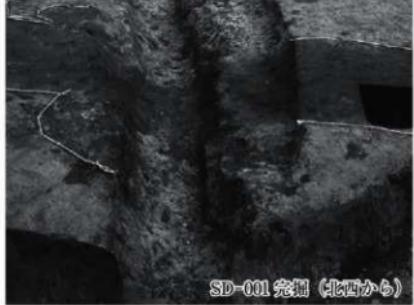
SS-011 北西溝・SD-001 完掘（北西から）



SS-011 北西溝・SD-001 完掘（北東から）



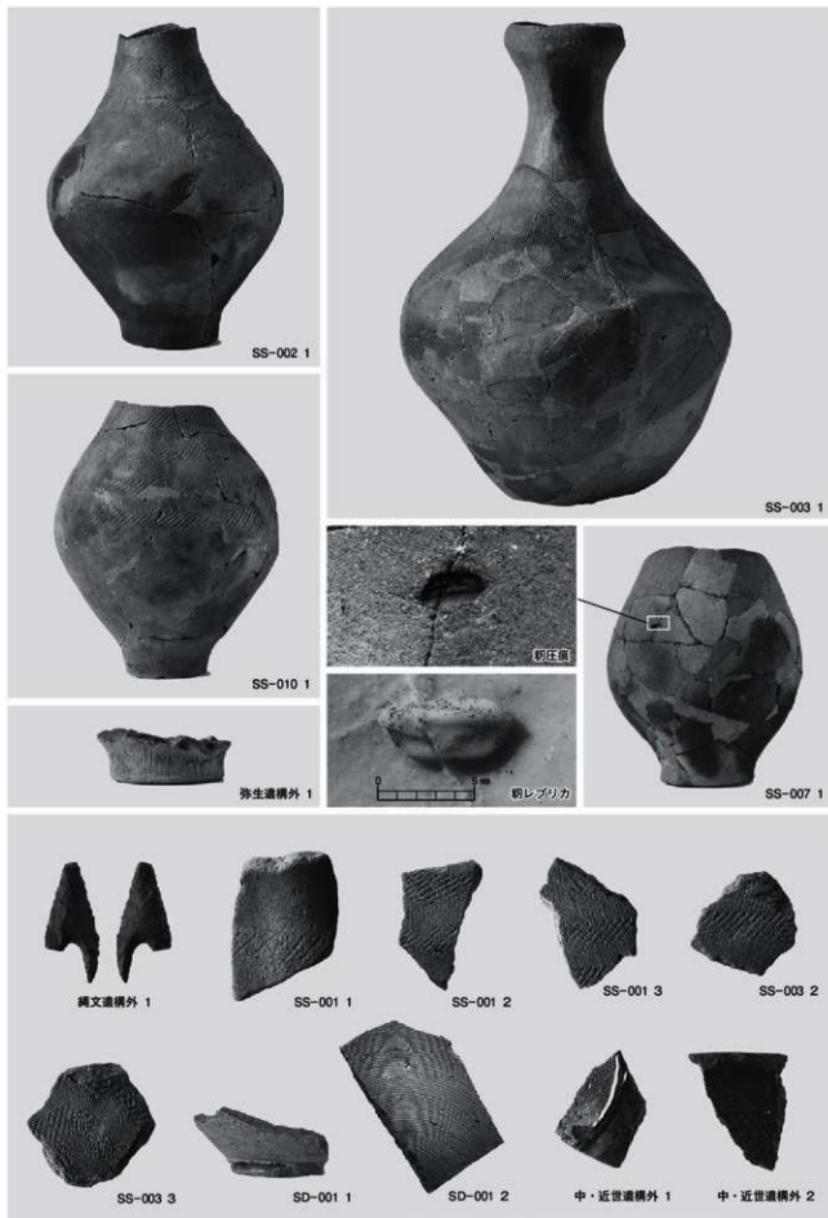
SD-001・SS-011 北西溝完掘（北西から）



SD-001 完掘（北西から）



SD-001 セクション（北西から）



報告書抄録

ふりがな	とうがねしどうにわいせき							
書名	東金市道庭遺跡							
副書名	農業大学校出荷調製施設新築工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第45集							
編著者名	鈴木 彩奈 蜂屋 孝之							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2023年2月13日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
どうにわいせき 道庭遺跡	とうがねしのいとうのこゑぎ 東金市家之子字 こわらわのこゑぎ 西大宮台1083-1	12213	008	35度 58分 98秒	140度 37分 80秒	20210802 ～20211130	1.100m ²	施設建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
道庭遺跡	包蔵地	縄文	陷穴 1基		縄文時代石器			
	集落跡	弥生	方形周溝墓 11基		弥生土器			
	包蔵地	中・近世	溝 1条					
要約	弥生時代中期宮ノ台式期の方形周溝墓が11基検出された。これまでに知られていた方形周溝墓群に新たな資料が加わり、墓域の状況がさらに明らかになった。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第45集

東金市道庭遺跡

— 農業大学校出荷調製施設新築工事埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和5年2月13日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉市中央区市場町1-1

印 刷

株式会社 正文社

千葉市中央区都町1-10-6

